V. 西 側 遺 物 包 含 層

Ⅴ．西側遺物包含層

本章では、西側遺物包含層出土遺物のうち、縄文土器について扱う。西側遺物包含層は、第Ⅲ章において記したように、1 枚の層を確認しただけで、分層することはできなかった。そのため、ここでは東側遺物包含層及び他遺跡の層位を参考に、類別に説明してゆく。

1．出土土器

第 1 類；第 592 図 1。

胎土に繊維を含むものである。多段のループ縄文が施されている。

第 2 類；第 592 図 2～3。

ａ類；第 592 図 2。口縁の上・下端部に刻目文をもつものである。

ｂ類；第 592 図 3。小波状をなす貼付部を口縁にもつものである。

第 3 類；第 592 図 4～8。

ａ類；第 592 図 4～5。口縁部が肥厚して外傾するものである。口縁部には、太描きの沈線文によって、文様が施されている。

ｂ類；第 592 図 6。内弯しながら外傾する口縁部には、太描きの横位平行沈線と半截竹管による横位連続刺突文が施されている。

ｃ類；第 592 図 7～8。頸胴部にふたつのくびれ部をもつと思われる器形である。粘土紐貼付文と半截竹管による連続刺突文・押引き文によって文様が構成されている。

第 4 類；第 592 図 10。

隆線文と半截竹管による平行沈線文・連続刺突文によって文様が構成されるものである。

第 5 類；第 592 図 11～第 597 図 13。

ａ類；第 592 図 11～12。内弯しながら外傾する口縁文には、弧状区画隆線文が施されるものである。

ｂ類；第 592 図 13～14。口縁部が内弯し、いわゆるキャリパー状を呈するもので、口縁上部には短い外傾部が設けられている。隆線文と沈線文によって、文様が構成されている。

ｃ類；第 592 図 15～第 594 図。口縁部が内弯しながら外傾し、波状縁を呈するもので、隆線文、沈線文、交互刺突文等によって文様が構成されるものである。波頂部の形態としては、弁状を基調とし、圭頭状、丸山状、曲玉状等、種々のバラエティーがある。口縁部文様の多くは波頂部の縦位文間に弧状文が施されるものである。

d類；第595図～597図9。頸部にくびれ部をもち、胴部の膨むものである。胴上部に、主文様帯が構成され、弧状区画隆線文、相対する弧状区画隆線文と沈線文、交互刺突文との組合わせを基調としている。

e類；第597図10～12。頸部がゆるい「く」字状にくびれ、口縁部が無文のものである。

f類；第597図13。複合口縁部をもつ小形の浅鉢形土器である。

第6類；第598図～第600図。

a類；第598図1～16。小波状縁ないしは平縁で、口縁部が内弯しながら外傾し、隆線文、押圧縄文によって文様が施されるものである。

b類；第599図1～2。波状縁で波頂部先端のとがるものである。波状縁片側にのみ、小波状部や刻目文が施され、隆線文と押引き文によって文様が構成されている。1 の波頂部内面には獣面が付されている。

c類；第599図3。波状縁で小弁状を呈するものである。口縁部には、弧状押圧縄文が施されている。

d類；第600図1～3。頸部にくびれ部を持ち、胴部の膨らむものである。胴上部に、主文様帯が構成され、弧状区画隆線文、相対する弧状区画隆線文と押圧縄文によって施されている。1の口縁部は、弁状を呈する波状縁である。

e類；第600図4～5。胴部から口縁部にかけて、ゆるやかに外反する器形で、隆線文、押圧縄文によって文様が施されるものである。

f類；第600図6。浅鉢形土器で、口縁部には「χ」字状区画隆線文、横位平行押圧縄文が施されている。

第7類；第601図1～10。

a類；第601図1～2・5～10。深鉢形土器である。口縁上部には連弧状貼付文、連続する縦位押圧縄文が多用されている。胴部には、縄文結節文が施されるものが多い。

b類；第601図3～4。浅鉢形土器である。口縁部には、連続する縦位押圧縄文が施されている。

第8類；第601図11～16。

a類；第601図11～14。深鉢形土器である。文様は主として、隆線文、刺突文、沈線文によって施されている。13には、押圧縄文が施されている。

b類；第601図15～16。浅鉢形土器である。口縁部の隆線文間には、刺突文が施されている。

第9類；第601図17。深鉢形土器である。隆線文、沈線文によって渦巻状文が施されている。

2．土器の編年的位置

第１類土器は、船入島貝塚上層（角田；1936）中に類例があり、大木１式あるいは、上川名Ⅱ式～大木１式に至る諸型式（林；1965）とされているものである。東側遺物包含層の層中にも、若干混在して認められた。

第２類土器は、大木囲貝塚ＣＳ77 地区ａ区３ｃ～3ｂ層（八巻；1979）中に類例があり、大木５式とされているものである。東側遺物包含層の層中にも、若干混在して認められた。

第３類土器は、小梁川遺跡東側遺物包含層の第Ⅰ群土器に相当すると思われるものである。

第４類土器は、小梁川遺跡東側遺物包含層の第Ⅱ群土器に相当すると思われるものである。

第５類土器は、小梁川遺跡東側遺物包含層の第Ⅲ群土器に相当すると思われるものである。

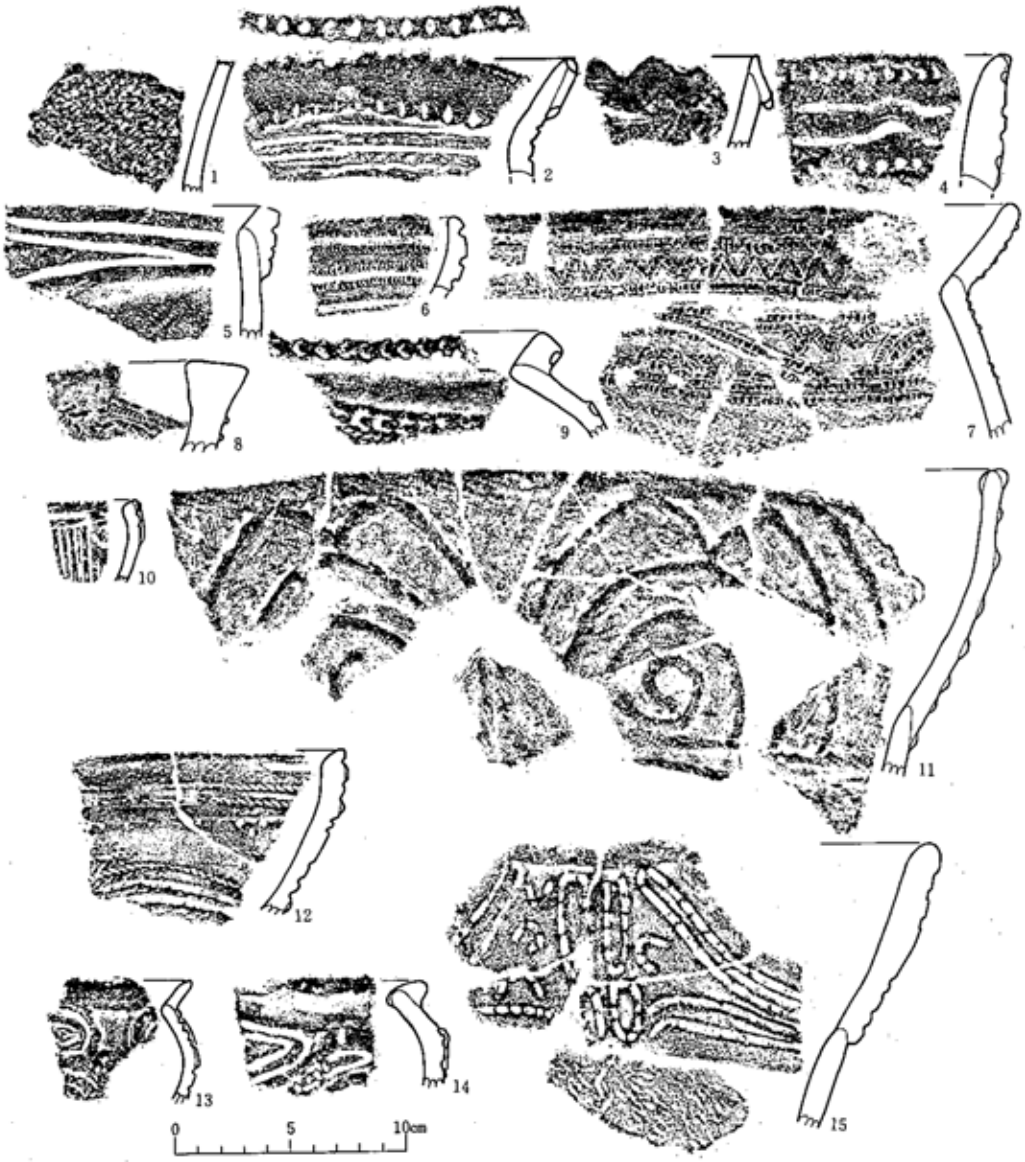
第６類土器は、小梁川遺跡東側遺物包含層の第Ⅳ群土器に相当すると思われるものである。

第７類土器は、小梁川遺跡東側遺物包含層の第Ⅴ群土器に相当すると思われるものである。

第８類土器は、長者原貝塚（阿部・遊佐；1978）第１群土器中に類例があり、大木８ａ式とされているものである。

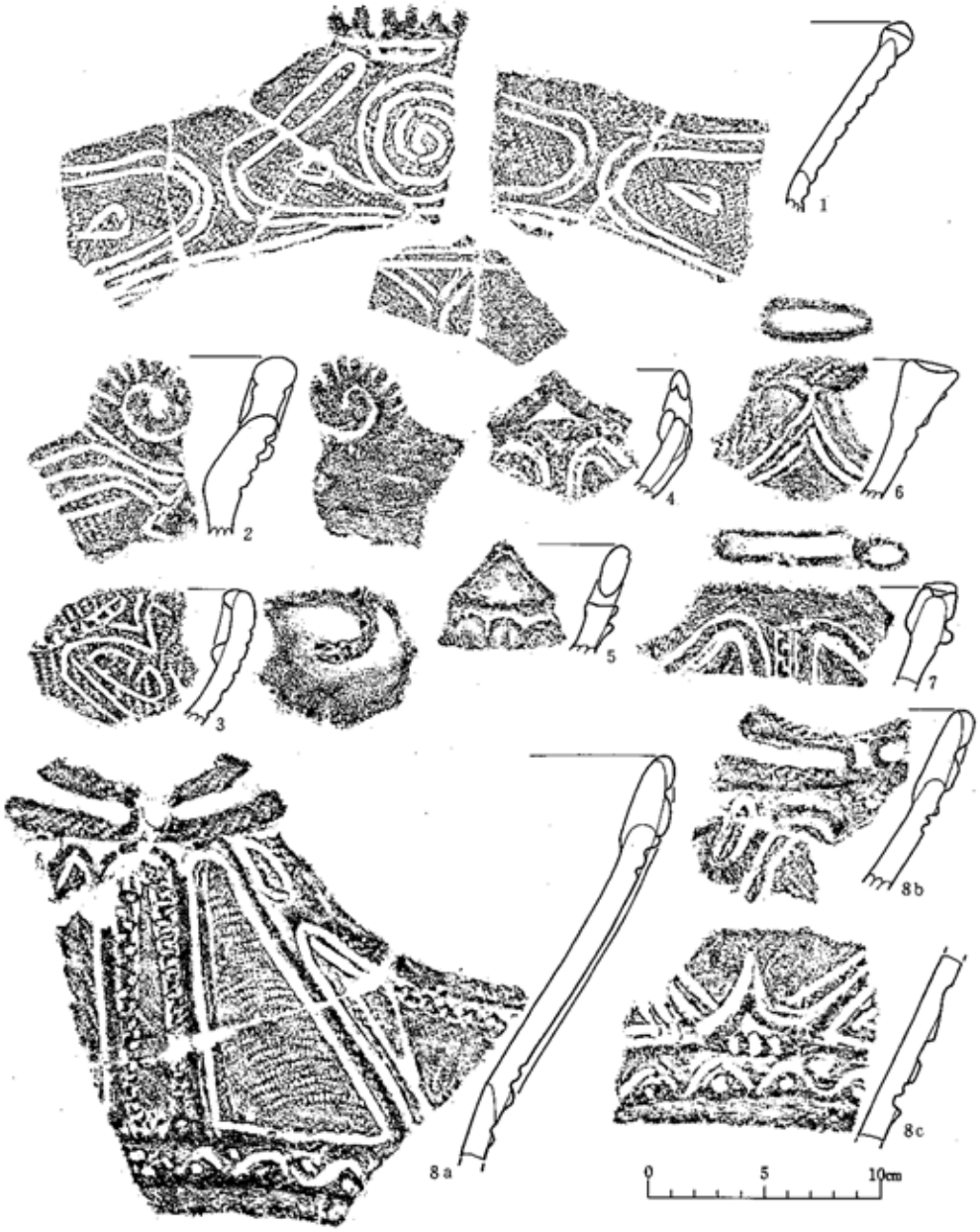
第９類土器は、勝負沢遺跡（丹羽・阿部・小野寺；1982）第Ⅱ群土器や大松沢貝塚出土土器中に類例があり、大木８ｂ式とされているものである。

以上、西側遺物包含層の遺物の出土状況から、主体をなすのは、第５類の大木７ａ式及び、第６類の大木７ｂ式であり、東側遺物包含層の第Ⅲ群土器から第Ⅳ群土器の形成期に併行して、遺物包含層が形成されたものと考えられる。他類の土器については、いずれも小片であり、２次廃棄ないしは、上層からの攪乱による混入の可能性が高い。



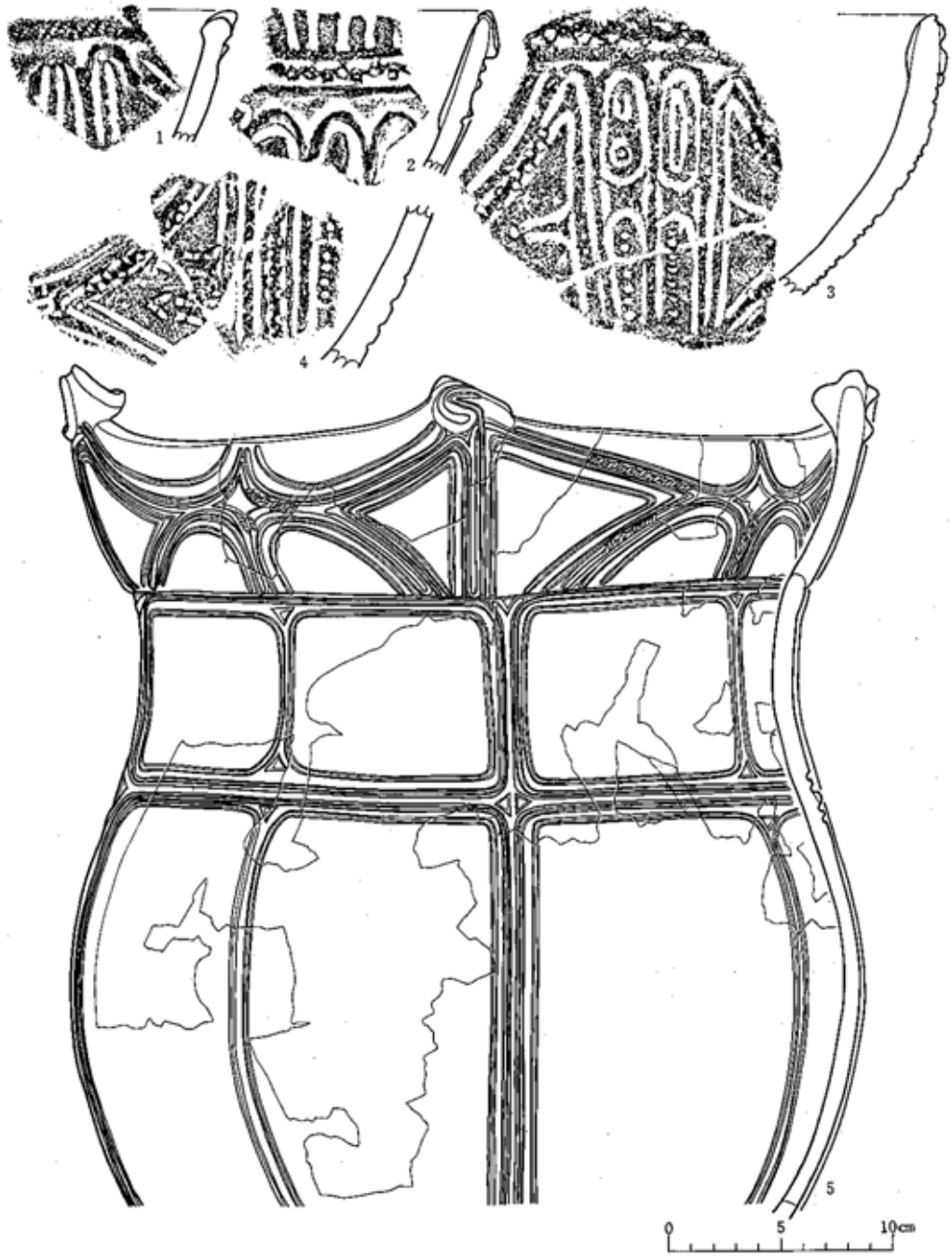
番号	地区・層位	器形・分類	文様の特徴	図版
1	EB－EE84区・包1層	深鉢・第1類	胴部；ループ縄文（RL），胎土；繊維を含む	321－1
2	EB－EF86区・包1層	深鉢・第2a類	口縁部；平縁，刻目文（上端・下端），頸部；横位平行沈線文，縄文（LR）	321－2
3	EB－EE84区・包1層	深鉢・第2b類	口縁部；小波状縁，無文，胴部；縄文（LR）	321－3
4	EB－EF85区・包1層	深鉢・第3a類	口縁部；平縁；連続刺突文（上部・下部），弧状沈線文	321－4
5	EE83区・包1層	深鉢・第3a類	口縁部；波状縁；横位沈線文，口縁に沿う沈線文，縄文（LR），胴部；縄文（LR）	321－5
6	EF86区・包1層	深鉢・第3b類	口縁部；平縁，横位平行沈線文，半截竹管による連続刺突文	321－6
7	EB－ED83区・包1層	深鉢・第3c類	口縁部；平縁，横位平行粘土紐貼付文，楕円状粘土紐貼付文，半截竹管による押引き文，胴部；山形状・弧状・楕円状粘土紐貼付文，半截竹管による押引き文，縄文（RL）	321－7
8	ED85区・包1層	深鉢・第3c類	口縁部；波状縁，粘土紐貼付文，半截竹管による連続刺突文	321－8
9	EB－EE83区・包1層	深鉢・第 類	口縁部；平縁，半截竹管による連続刺突文（口縁上部），胴部；半截竹管による連続刺突文，押圧縄文（RL）	321－9
10	EB－EF85区・包1層	深鉢・第4類	口縁部；平縁，弧状隆線文，半截竹管による連続刺突文，半截竹管による横位・縦位平行沈線文	321－10
11	EB－EE84区・包1層	深鉢・第5a類	口縁部；平縁，弧状区画隆線文，渦巻状隆線文	321－14
12	EF86区・包1層	深鉢・第5a類	口縁部；平縁，弧状区画隆線文，隆線に沿う押圧縄文（LR）・沈線文，交互刺突文	321－12
13	EC85区・包1層	深鉢・第5b類	口縁部；平縁，「ｘ」字状区画隆線文，隆線に沿う沈線文	321－11
14	EF86区・包1層	深鉢・第5b類	口縁部；平縁，弧状区画隆線文，隆線に沿う沈線文，交互刺突文	
15	ED82区・包1層	深鉢・第5c類	口縁部；波状縁，押引き文，胴部；縄文（LL）結節文（片結び一類）	321－13

第592図　西側遺物包含層出土土器(1)



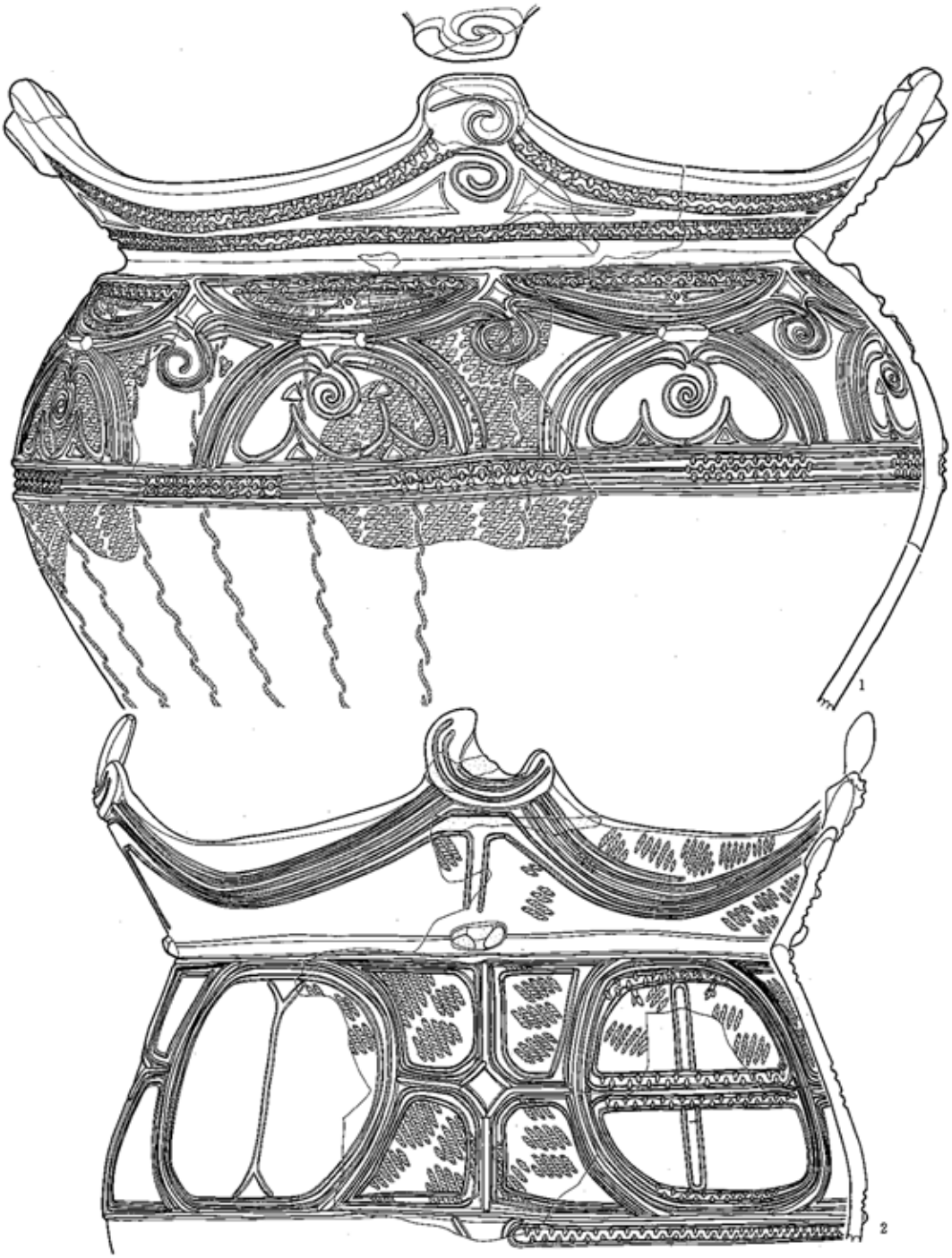
番号	地区・層位	器形・分類	文様の特徴	図版
1	EB－EE85区・包1層	探鉢・第5c類	口縁部：波状縁、縦位刻目文（波頂部）、弧状区画沈線文、縄巻状沈線文、三角形状沈線文、縄文（RL） 胴部：「Y」字状沈線文、縄文（RL）	321－16
2	EB－EE84区・包1層	探鉢・第5c類	口縁部：波状縁、縦位短沈線文（波頂部）、弧状沈線文、縄文（LR）	321－15
3	EB－EF86区・包1層	探鉢・第5c類	口縁部：波状縁、「の」字状貼付文（波頂部内面）、弧状沈線文、交互刺突文	321－22
4	EE83区・包1層	探鉢・第5c類	口縁部：波状縁、「Y」字状懸垂隆線文、隆線に沿う沈線文、（車滅）	321－21
5	EB－EE84区・包1層	探鉢・第5c類	口縁部：波状縁、連弧状隆線文、押圧縄文（Lr）、縄文（Lr）	321－20
6	EB85区・包1層	探鉢・第5c類	口縁部：波状縁、弧状区画隆線文、隆線に沿う沈線文	321－17
7	EE86区・包1層	探鉢・第5c類	口縁部：波状縁、弧状区画隆線文、隆線に沿う沈線文、交互刺突文	321－23
8a,b,c	EE83区・包1層 EB－EE84区・包1層 EB－EE83区・包1層	探鉢・第5c類	口縁部：波状縁、弧状区画隆線文、隆線に沿う沈線文、交互刺突文、縄文（LR）、胴部：連弧状沈線文、交互刺突文	321－18 24 25

第593図　西側遺物包含層出土土器(2)



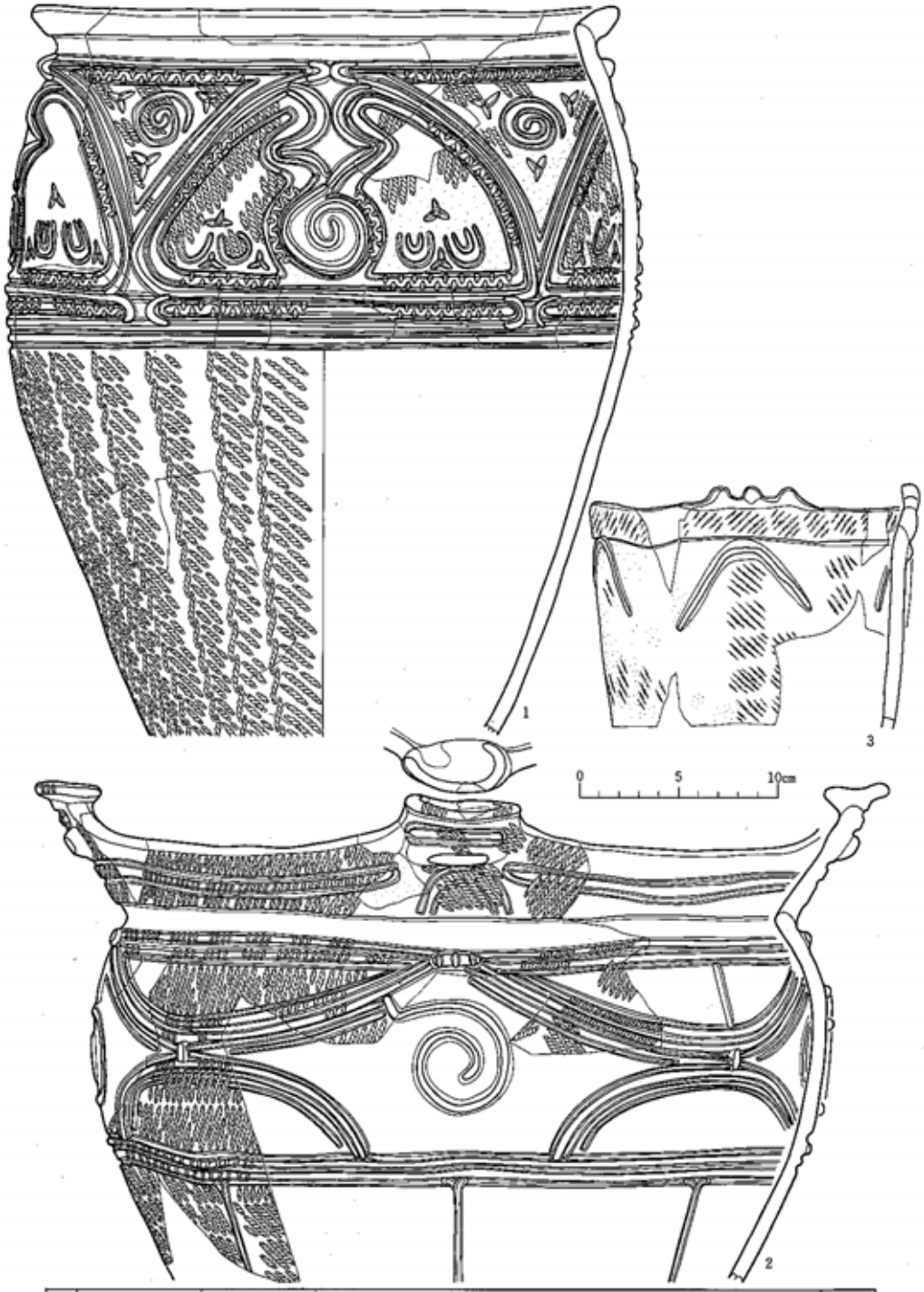
番号	地区・層位	器形・分類	文様の特徴	図版
1	EB－EE84区・包1層	深鉢・第5c類	口縁部：波状縁，弧状区画隆線文，隆線に沿う沈線文，縄文（LR）	322－1
2	ED83区・包1層	深鉢・第5c類	口縁部：波状縁，扇状無沈線文〔波状縁〕，弧状区画隆線文，隆線に沿う沈線文，交互刺突文	322－2
3	EF86区・包1層	深鉢・第5c類	口縁部：波状縁，弧状区画隆線文，隆線に沿う沈線文，連弧状沈線文，交互刺突文	322－3
4	EB－EE84区・包1層	深鉢・第5c類	口縁部：区画隆線文，隆線に沿う沈線文，押引き文，交互刺突文	322－5
5	EA－EE84区・包1層	深鉢・第5c類	口縁部：突起のつく波状縁，「の」字状貼付文（突起内外面），弧状区画隆線文，隆線に沿う沈線文，胴部：「Y」字状隆線隆線文，隆線に沿う沈線文，方形状沈線文，三角形の重出	317

第594図　西側遺物包含層出土土器(3)



番号	地区・層位	部形・分類	文様の特徴	図版
1	EE−84区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部：波状縁、「の」字状貼付文（波頂部内外面）、交互側面線、[illegible]、三角形の配置、胴部：[illegible]、[illegible]、三角形の配置、交互[illegible]、縄文（RL）、[illegible]（[illegible]）	318−2
2	ED−86区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部：[illegible]、三日月状[illegible]、区画[illegible]、縄文（LR）、[illegible]、[illegible]、胴部：区画[illegible]、[illegible]、交互[illegible]、縄文（LR）	320−2

第595図　西側遺物包含層出土土器(4)

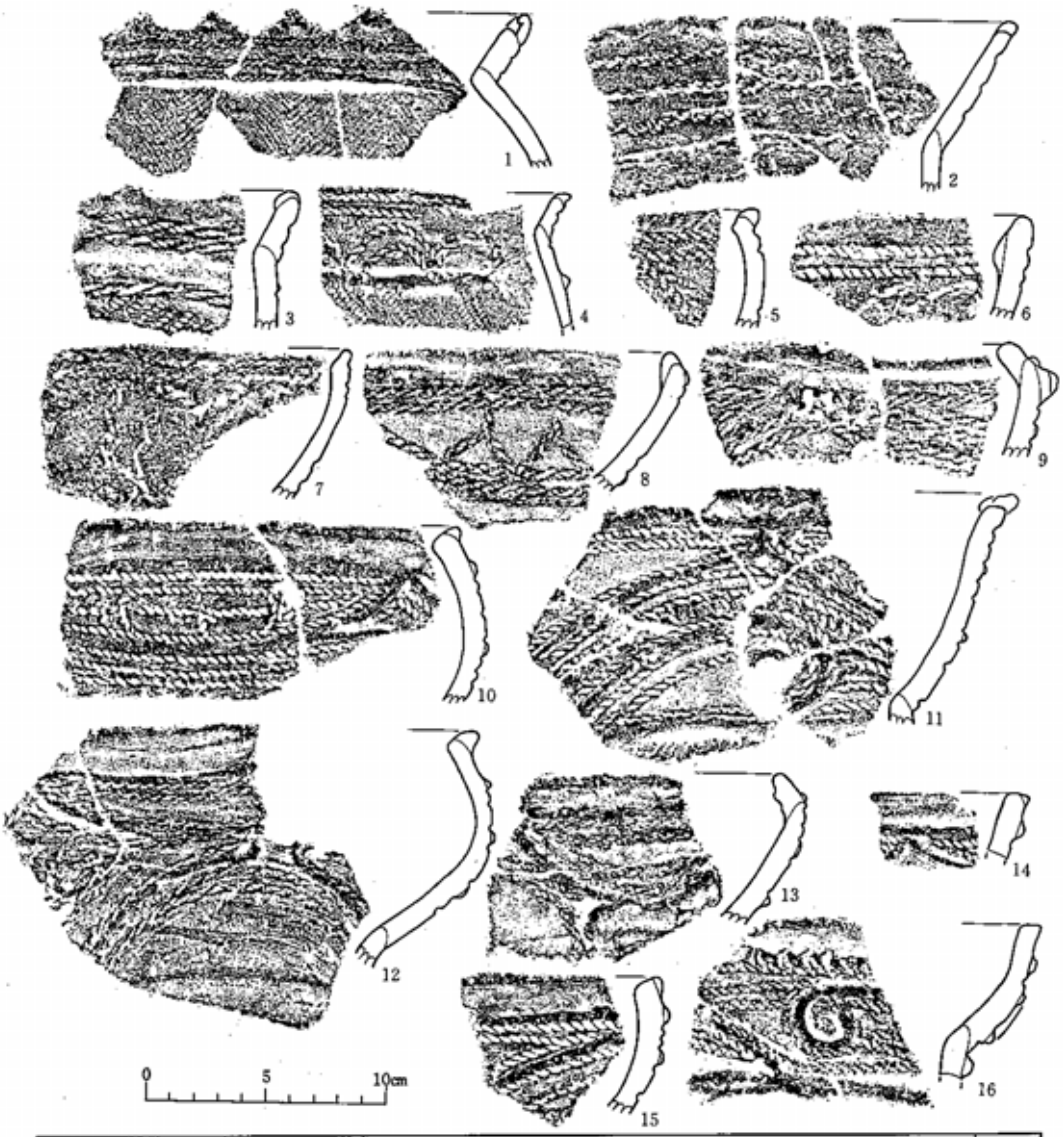


番号	地区・層位	器形・分類	文　様　の　特　徴	図　版
1	ED－EF85区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部：平縁、縄文、胴部：弧状区画隆線文、縄巻文、浦弧状文、三角形の厚盛、「ｘ」字状貼付文、縄文（LR）結節文（片結び一種）	319－1
2	EB－EF85区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部：波状縁、「の」字状突起、楕円形貼付文、抉縁文、縄文（LR）、胴部：相対する弧状区画隆線文、隅巻状隆線文、抉縁文、縄文（LR）	318－1
3	EB－EE85区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部：小波状部のつく平縁、縄文（Lr）、胴部：弧状隆線文、縄文（Lr）	322－37

第596図　西側遺物包含層出土土器(5)

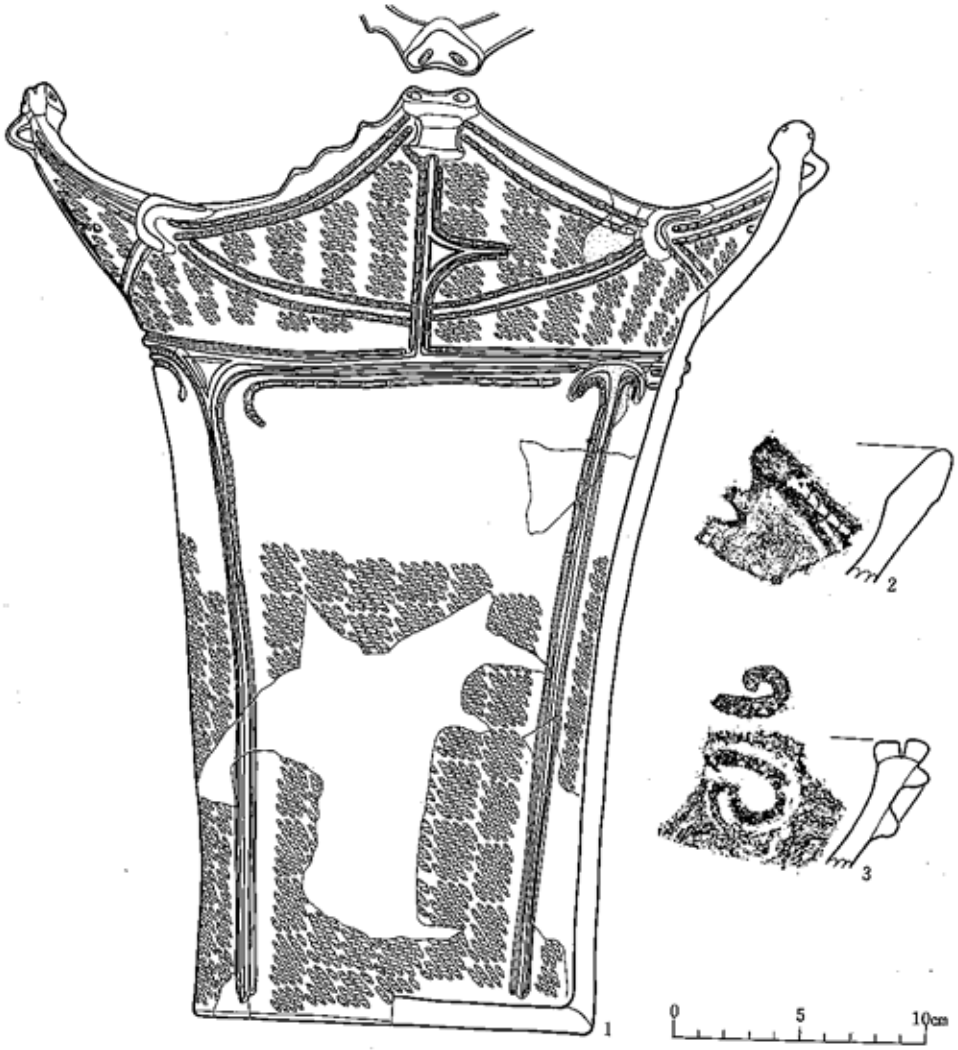
番号	地区・層位	器形・分類	文　様　の　特　徴	図版
1	EB－EE84区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部；波状縁，「の」字状貼付文（波頂部内外面），山形状沈線文	322－4
2	EB－EE84区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部；波状縁，菱形状隆線文，隆線に沿う沈線文，縄文（RL）	322－6
3	EB－EE84区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部；小波状縁，無文，胴部；横位平行沈線文，交互刺突文，縄文（RL）	322－7
4	EB－EE86区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部；平縁，無文，弧状区画隆線文，楕円形状沈線文，交互刺突文，縄文（RL）	322－8
5	EB－EE85区・包1層	深鉢・第5d類	胴部；「メ」字状区画隆線文，隆線に沿う沈線文，綾杉状沈線文，縄文（Lr）	322－9
6	EB－EE83区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部；弧状区画隆線文，隆線に沿う沈線文，連弧状沈線文，三角形の彫去	322－10
7	ED82区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部；平縁，無文，頸部；横位平行沈線文，平截竹管による連続刺突文，「Y」字状懸垂沈線文，縄文（RL）	322－11
8	EE85区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部；平縁，無文，胴部；弧状区画隆線文，隆線に沿う沈線文，交互刺突文，縄文（RL）	322－12
9	EB－EE83区・包1層	深鉢・第5d類	口縁部；突起のつく平縁，円環状貼付文（？），区画隆線文，弧状沈線文，交互刺突文，縄文（RL）	322－13
10	EE86区・包1層	深鉢・第5e類	口縁部；小波状縁，無文，頸部；横位沈線文，胴部；縄文（RL）結節文	
11	EB－EF86区・包1層	深鉢・第5e類	口縁部；小突起のつく平縁，縦位押圧縄文（R ℓ）（突起上端），無文，胴部；縄文（LL）結節文	
12	ET86区・包1層	深鉢・第5e類	口縁部；平縁，無文，胴部；縄文（RL）	
13	EA76区・包1層	浅鉢・第5f類	口縁部；平縁，無文，胴部；無文	

第597図　西側遺物包含層出土土器(6)



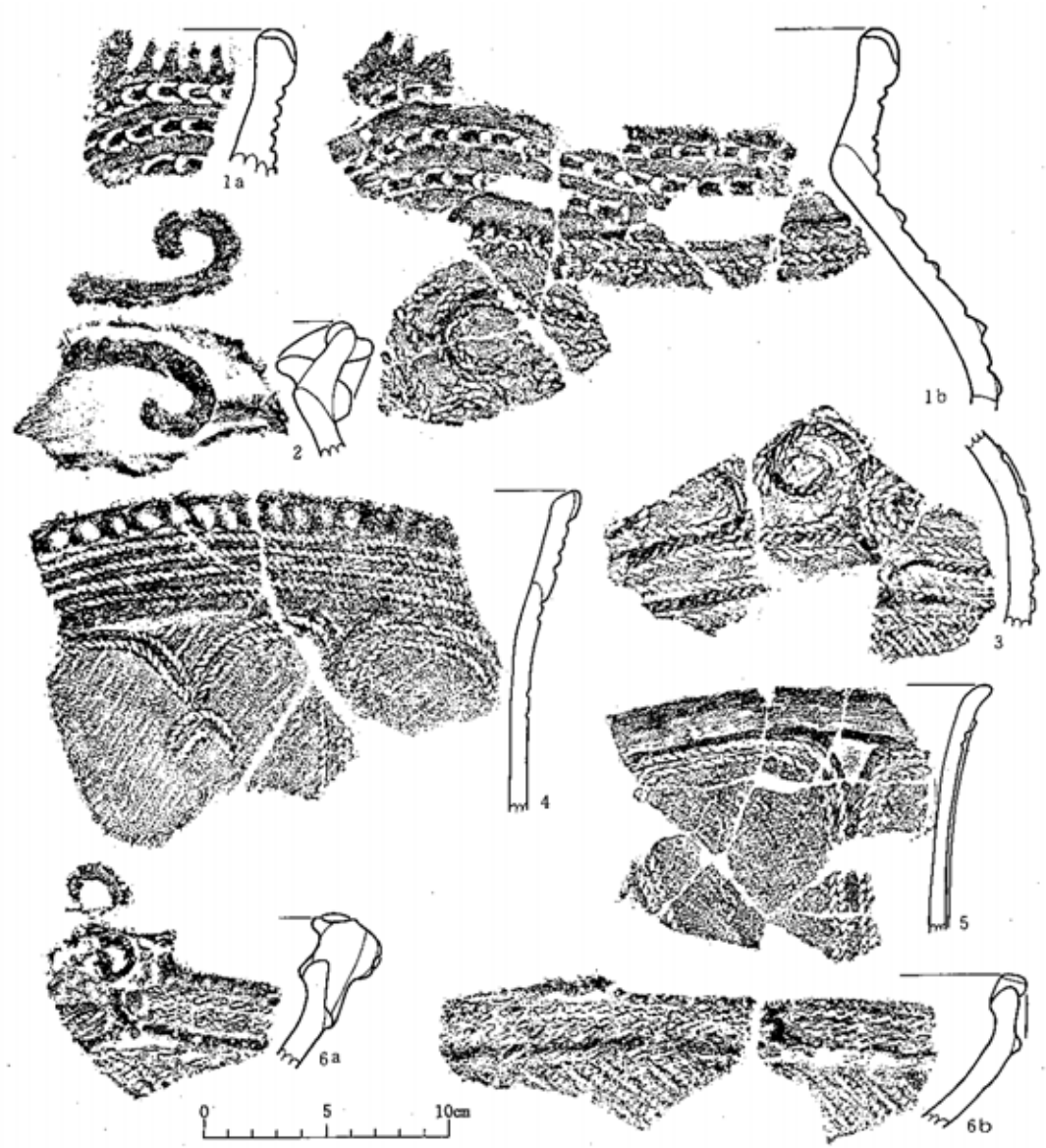
番号	地区・層位	器形・分類	文様の特徴	図版
1	EB−EE83区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：小波状縁，横位平行押圧縄文（結束（第1種）RL×LR），胴部：結束（第1種）羽状縄文（RL×LR）	322−14
2	EE83区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：小波状縁，横位平行押圧縄文（RL），胴部：縄文（RL）	322−16
3	EE−EE84区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：小波状縁，横位平行押圧縄文（RL），胴部：横位押圧縄文（RL），縄文（RL）	322−17
4	EB−EE83区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，横位平行押圧縄文（LR），連弧状押圧縄文（LR），頸部：横位隆帯，胴部：縄文（LR）	322−18
5	ED82区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，横位平行押圧縄文（LR），弧状押圧縄文（LR），縄文（LR）	322−15
6	EF86区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，横位平行押圧縄文（LR），弧状押圧縄文（LR）	322−19
7	EB−EE84区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，横位平行押圧縄文（RL），弧状押圧縄文（RL），縄文（RL）結節文（片結び一類）	322−20
8	EB−EE84区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，横位平行押圧縄文（RL），三叉状押圧縄文（RL）	322−21
9	EB−EE83区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，弧状区画隆線文，楕円形状貼付文，刻目文，隆線に沿う押圧縄文（RL）	322−22
10	EB−EF86区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，弧状区画隆線文，渦巻状隆線文，押圧縄文（Lr）	322−26
11	EB−EE84区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：小突起のつく平縁，弧状区画隆線文，渦巻状隆線文，隆線に沿う押圧縄文（Lr），梯子状押圧縄文（RL）	322−24
12	EE88区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，相対する弧状区画隆線文，隆線に沿う押圧縄文（RL），渦巻状押圧縄文（RL）	322−25
13	EB−EE84区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，弧状区画隆線文，隆線に沿う押圧縄文（RL）	322−30
14	EB−EE84区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，弧状区画隆線文，隆線に沿う押圧縄文（Lr）	322−29
15	EB−EE84区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，弧状区画隆線文，隆線に沿う押圧縄文（Lr）	322−23
16	EE−EF86区・包1層	深鉢・第6a類	口縁部：平縁，弧状区画隆線文，渦巻状隆線文，隆線に沿う押圧縄文（LR），半截竹管による連続刺突文	323−1

第598図　西側遺物包含層出土土器(7)



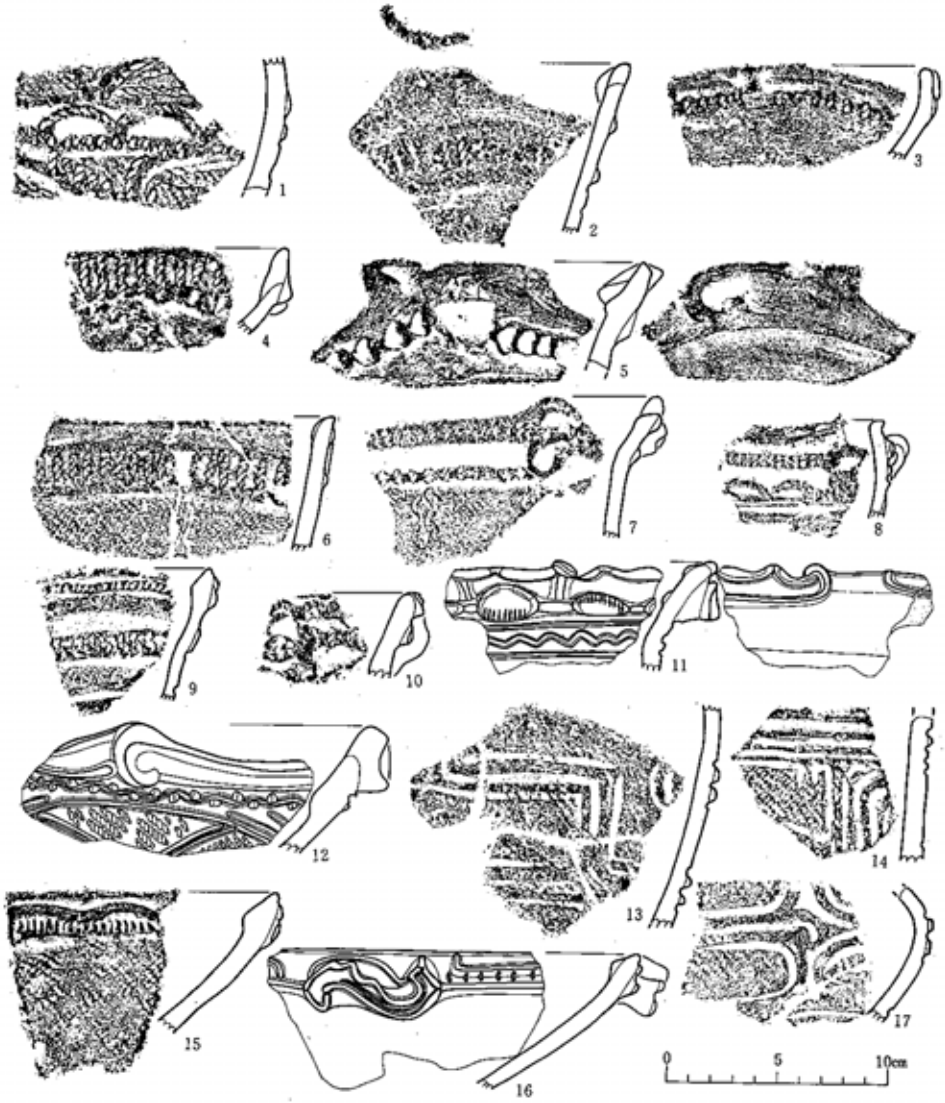
番号	地区・層位	器形・分類	文様の特徴	図版
1	EE−EF86区・包1層	深鉢・第6b類	口縁部：波状縁，鉄面突起，縦位区画隆線文，弧状押引き文，高巻状貼付文，縄文（LR），胴部：横垂隆線文，隆線に沿う押引き文	320−1
2	ED−86区・包1層	深鉢・第6b類	口縁部：波状縁，刻目文，口縁に沿う押引き文	322−28
3	EB−EE83区・包1層	深鉢・第6c類	口縁部：波状縁，「の」字状貼付文，弧状押正縄文（LR）	322−27

第599図　西側遺物包含層出土土器(8)



番号	地区・層位	器形・分類	文様の特徴	図版
1	EB－EE84区・包1層	深鉢・第6d類	口縁部：波状縁、刻目文、口縁に沿う半截竹管による平行沈線文、半截竹管による連続刺突文、胴部：相対する弧状区画隆線文、渦巻状隆線文、隆線に沿う押圧縄文（LR）	322－3
2	EE－85区・包1層	深鉢・第6d類	口縁部：波状縁、「の」字状貼付文（波頂部内外面）、胴部：弧状区画隆線文、押圧縄文（Lr）	322－2
3	ED82区・包1層	深鉢・第6d類	胴部：弧状区画隆線文、渦巻状隆線文、隆線に沿う押圧縄文（LR）、縄文（LR）	322－5
4	EB－EE86区・包1層	深鉢・第6e類	口縁部：平縁、横位平行押圧縄文（Lr）、横位隆線文、指頭状圧痕（隆線上）、胴部：「Y」字状懸垂隆線文、連弧状押圧縄文（Lr）、縄文（RL）	322－6
5	EB－EE84区・包1層	深鉢・第6e類	口縁部：平縁、無文、頸部：横位隆線文、胴部：「Y」字状懸垂隆線文、隆線に沿う押圧縄文（LR）、縄文（LR）、結節文（片結び一類）	322－7
6a,b	EE－84区・包1層 EB85区・包1層	浅鉢・第6f類	口縁部：突起のつく平縁、「x」字状区画隆線文、横位平行押圧縄文（RL）、胴部：縄文（RL）	322－4 12

第600図　西側遺物包含層出土土器(9)



番号	地区・層位	器形・分類	文様の特徴	図版
1	EE－85区・包1層	深鉢・第7a類	胴部：弧状区画隆線文，連弧状隆線文，押圧縄文（LR），縄文（LR）	323－15
2	EB－EF85区・包1層	深鉢・第7a類	口縁部：波状縁，「の」字状貼付文（波頂部内面），弧状区画隆線文，隆線に沿う押圧縄文（LR），棒状状押圧縄文（LR）	323－11
3	EF－86区・包1層	浅鉢・第7b類	口縁部：平縁，「ヌ」字状区画隆線文，縦位押圧縄文（LR），胴部：無文	323－13
4	EB－EE86区・包1層	浅鉢・第7b類	口縁部：平縁，弧状隆線文，縦位押圧縄文（LR），指頭状圧痕・押圧縄文（LR）〔隆線上〕	323－9
5	EA－85区・包1層	深鉢・第7a類	口縁部：波状縁，「S」字状貼付文〔波頂部〕，口縁に沿う隆線文，半截竹管による連続刺突文〔隆線上〕	323－14
6	CK－85区・包1層	深鉢・第7a類	口縁部：平縁，「ヌ」字状区画隆線文，縦位押圧縄文（LR），胴部：縄文（LR）節節文（片結び一単）	323－24
7	EF－85区・包1層	深鉢・第7a類	口縁部：突起のつく平縁，横位平行隆線文，縦位押圧縄文（LR），渦巻状隆線文，胴部：縄文（LR）結節文（片結び一単）	323－17
8	EB－EE85区・包1層	深鉢・第7a類	口縁部：平縁，横位平行隆線文，縦位押圧縄文〔隆線上〕，横状把手，連弧状貼付文，横位平行沈線文	323－10
9	EA－82区・包1層	深鉢・第7a類	口縁部：平縁，波状貼付文，縦位刻目文，縦位押圧縄文（RL），横位平行沈線文	323－16
10	EB－EF85区・包1層	深鉢・第7a類	口縁部：平縁，連弧状貼付文，縦位刻目文，区画隆線文，縦位押圧縄文（LR）〔隆線上〕	323－8
11	EE－85区・包1層	深鉢・第8a類	口縁部：小波状縁，横位隆線文，指頭状圧痕，縦位刻目文，胴部：横位平行沈線文，斜角状沈線文	323－19
12	EB－EE86区・包1層	深鉢・第8a類	口縁部：波状縁，渦巻状貼付文，弧状区画隆線文，隆線に沿う沈線文，交互刺突文，縄文（RL）	323－20
13	EB－82区・包1層	深鉢・第8a類	胴部：区画隆線文，隆線に沿う沈線文，押圧縄文（LR），縄文（LR）	323－18
14	EC－82区・包1層	深鉢・第8a類	胴部：区画隆線文，隆線に沿う沈線文，縄文（LR）	323－22
15	EA－84区・包1層	浅鉢・第8b類	口縁部：平縁，波状貼付文，縦位刻目文，胴部：縄文（LR）	323－23
16	EB－82区・包1層	浅鉢・第8b類	口縁部：平縁，横位平行隆線文，「S」字状突起，粘土紐貼付文，半截竹管による連続刺突文，胴部：無文	323－25
17	EA－85区・包1層	深鉢・第9類	口縁部：弧状区画隆線文，渦巻状隆線文，隆線に沿う沈線文，縄文（RL）	323－21

第601図　西側遺物包含層出土土器(10)

VI. 土　製　品

Ⅵ. 土　製　品

遺物包含層から出土した土器以外の土製品は 58 点、岩製品は 1 点である。土製品は、土偶 16 点、三脚形土製品（三角形土版とも呼ばれる）14 点、耳飾り 4 点、円盤状土製品 23 点、不明土製品 2 点からなる。以下、土偶、三脚形土製品、耳飾り、円盤状土製品、不明土製品、岩製品の順で個々に記することにする。

1．土　偶（第 602 図～第 605 図、図版 324）

ア．形　態

土偶は、16 点出土している。総て破損品で完形品はない。形態的には極めて類似性の強いものである。以下、各部位ごとにその特徴について触れる。

4 点の頭部資料は、総て短い円柱状を呈し、頭頂部は広く平らな円盤状を呈している。頭頂部周縁の前面に縦位の窪みのあるもの（第 604 図 7）も 1 点あるが、これをも含めて目・鼻・口などの顔面表現のあるものはない。

9 点の胸部資料は、総て厚みのある板状を呈し後方への反りの見られるものが多い。左右の胸部側縁はそれぞれ突出し、総て両腕を水平に伸ばした形態を示している。乳房は隆起で表現され、胸部前面に一対の丸い高まりで表わすもの 4 点、両腕の端部から長い隆帯が伸び中央部でそれぞれ下方へ垂下する形をとるもの 3 点、両腕の端部間をW字状につないで垂下する乳房を表現するもの 2 点の 3 類がある。

5 点の腹部資料は、総て前面が臍部で盛り上がり、腰部は左右に強く張り出している。背面は広く皿状に窪み、臀部がさがって張り出すさがり尻状を呈している。胸部の後方への反りが顕著なものは臀部の後方への張り曲りも著しい。胸部が垂直ぎみのもの(第 602 図 6)は臀部の張り出しも少ない。臍部は、刺突によって小孔を穿つものが 3 点ある。

4 点の脚部資料は、総て円柱状を呈し、底面が広く平らにできている。

以上のことから本包含層出土土偶の形態的特徴をまとめると、上半身は、目・鼻・口などの顔面表現のない、頂部の平らな短い円柱状の頭部と両腕を水平に伸ばし、幾分後方へ反る厚みのある板状の胸部からなり、下半身は、強く左右に張った腰、盛り上がった臍部、広く皿状に窪む背面、下がり尻状の臀部、両下端部が連結し広く平らな底面を有する円柱状の脚部など、上半身に比べて大きく立体的に作られている。安定して立つことのできる立像土偶である。

文様についても形態同様、類似性が強い。一部、隆線文や連続刺突文、押し引き文の施されるものもあるが、二条の平行沈線文が主体を占めている。特徴的な施文としては、水平に伸ばした両腕の表裏に施される二条線、盛り上がる臍部や皿状の腹部背面を囲む弧線、胴部側縁に

縦位に走る数条の直線、腰部の渦文、脚部を横位に走る数条の平行線があげられる。

次に大きさについて見ると、16 点の土偶中、胸部破片が 9 点（56.3%）を占めており、両腕部の破損しないものが大半である。これらをもとに水平に伸ばした両腕間の長さを幅とし、この幅によって大きさを分けると、3 類に大別できる。A類は、幅が 10 センチメートル以上の大型のものである。B類は、幅が 6.5～10 センチメートル未満の中型のものである。C類は、幅が 6.5 センチメートルに満たない小型のものである。さらにこれらは、両腕部の表裏に施さけた二条の平行線の有無によって下記のように細分できる。

A類（幅が 10 センチメートル以上の大型、両腕部に二条線あり）

B類（幅が 6.5～10 センチメートル未満の中型）
- 1 類（両腕部に二条線あり）
- 2 類（両腕部に二条線なし）

土偶

C類（幅が 6.5 センチメートル未満の小型）
- 1 類（両腕部に二条線あり）
- 2 類（両腕部に二条線なし）

不明（破損品であるため不明なもの）

これらの分類基準をもとに 9 点の土偶を分類すると、A類は 2 点、B－1 類は 3 点、B－2 類は 1 点、C－1 類は 1 点、C－2 類は 2 点である。両腕部に二条線の認められないものは、中型品の一部と小型品に多い傾向を示している。これら 9 点の胸部破片以外の各種部位破片についても、その規模から推定した大型、中型、小型の別に分けると、総数 16 点の土偶は、それぞれ、大型品（A類）7 点、中型品（B類）4 点、小型品（C類）4 点、不明 1 点となり、大型品の多出傾向が認められる。

イ．土器群との関係

これらの土偶と土器群との関係は、出土層位から第 602 図 1 は、第Ⅰ群土器期に属するものである。第 602 図 2・3 は、第Ⅰ群土器期～第Ⅲ群土器期の間に、第 605 図 11～16 は、第Ⅰ群土器期～第Ⅴ群土器期の間にそれぞれ位置づけられる。なお、第Ⅰ群土器以降は 2 次廃棄の可能性を加味し、ここではすべて第Ⅰ群土器期～第□群土器期の間として、把握した。次項の遺物についても、同様である。

ウ．製作方法

欠損面の観察から製作方法の一端を知ることができる。欠損面の大半は、単に粘土の割れ口であったり、折れ口であったりするが、中には、欠損面が粘土塊の接合面から剥離した状態を示すものも 10 点（62.5%）ある。これらをもとに粘土塊の剥離痕の残る部位を見ると、頭部と胸部の間に見られるもの 4 点、腹部と脚部の間に見られるもの 3 点、乳房部に見られるもの 2

点、腹部前面に見られるもの3点に分けられる。このことは、頭部と胸部、腹部と脚部、乳房部、腹部前面をそれぞれ粘土塊で接合していることを示している。また、大型品には見られないが、中型品の一部と小型品に多く見られるものとして、欠損面に小孔の観察されるものが 4点（25%）ある。これらの小孔は、径3ミリメートル程のもので体内にほぼ垂直に観察される。これらの小孔内からは、炭粒が検出されており、細い棒状のものが焼成時に体内で炭化したものと考えられる。小孔の深いものは3.1センチメートルに達するものもある。これらの小孔の残存部位を見ると、頭部と胸部の間、胸部と腹部の間に認められる。特に、第　　図12の例によると、粘土塊の剥離面に小孔が観察される。この小孔は、粘土塊に細棒を突き刺した痕跡であり、細棒を芯に粘土で肉付けをするのではなく、粘土塊に細棒を突き刺して他の粘土塊とつなぐという接合方法をとったものと考えられる。

これらのことから、土偶製作に当たっては、頭部、胸部、腹部、脚部、乳房部前面の粘土塊をそれぞれ接合していく製作方法をとったものと考えられる。特に小型品については、粘土塊に細棒を突き刺して頭部と胸部、胸部と腹部の粘土塊を接合する方法も用いられている。この方法は、大型品には見られない方法であり、小型品の頭部と胸部の間や胸部と腹部の間は、大型品に比べてより細くあるいは薄く作る必要があり、後方への反りの表現も考慮すると、製作にあたっては、特に破損し安い部位であったと考えられる。これらの部位に細棒を補強をかねて用いたものかも知れない。

エ．付着物

第604図7と第605図14の腹部寄りの欠損面には付着物が観察される。第604図7の付着物については、アスファルトとは断定し難いが粘着性の強いものと考えられ、樹脂の可能性もある。第605図14の付着物は、アスファルトと考えられる。これらの付着物は、いずれも欠損面に認められ、壊れた土偶の修復に接着剤としてアスファルトなどを使用していることを示している。

オ．時　期

これらの土偶と土器群との関係については既に記した。本包含層出土土器は、第Ⅰ群～第Ⅴ群土器に大別される。これらを仙台湾周辺の土器型式に当てはめると、第Ⅰ群土器は縄文前期末大木6式に、第Ⅱ・Ⅲ群土器は縄文中期初頭大木7ａ式に、第Ⅳ・Ⅴ群土器は縄文中期前葉大木7ｂ式にそれぞれ比定される。よって、第602図1は、縄文前期末大木6式期に属するものであり、第602図2･3は、縄文前期末大木6式期～縄文中期初頭大木7ａ式期の間に、第602図4～第605図16は、縄文前期末大木6式期～縄文中期前葉大木7ｂ式期の間に、それぞれ位置付けられる。

以上述べたこれらの土偶に類似するものは、県内では、糠塚貝塚（小笠原；1984）から腹部や脚部の部位破片が4点、川下り響遺跡（松本；1929）から脚部破片1点、西裏遺跡(片倉・中

橋・後藤；1976）から脚部破片１点、曲木遺跡（片倉・中橋・後藤；1976）から腹部破片２点、鹿野山遺跡（村田町史編集委員会；1977）から脚部破片１点、中ノ内A遺跡（宮城県教育委員会；1985）から完形品１点（接合資料）を含む各種部位破片が15点それぞれ出土している。県外では、山形県の水木田遺跡（阿部・佐々木・佐藤；1984）、落合遺跡と村山市内（阿部；1982）、福島県の音坊遺跡（江坂；1970）、七郎内C遺跡（小平・他；1982）、新潟県の長峰、沖ノ原、岩野原、山下、栃倉、吉野屋、大蔵、貝塚、村杉、長者ヶ平の各遺跡（新潟県；1983）など縄文中期に属する多くの遺跡から出土している。これに対し、仙台湾周辺及び北上川流域のこの期の土偶（宮城県：糠塚貝塚、上野遺跡、岩手県：滝ノ沢遺跡、鳩岡崎遺跡、青森県：石神遺跡、一王寺遺跡出土例など）は、一部立体的なものも含むが大半は板状土偶であり本遺跡出土例とは明瞭に異なるものである。よって、本遺跡出土の土偶は、県南の一部及び山形県、福島県、新潟県に類例の多いことが言える。

欠損面にアスファルトの付着するものについては既に記した。これは、壊れた土偶の修復に接着剤としてアスファルトを使用したものと考えられるものである。壊れた土偶の修復に接着剤としてアスファルトを使用する例は、縄文後期以後に見られる（安孫子；1982）。本遺跡例は、縄文中期前葉まで溯るものであり、現在、最も古い時期に属する例と考えられる。

2．三脚形土製品（第606図～第607図、図版325）

三脚形土製品は、14点出土している。これらは大半が欠損品であり全容を知り得るものは少ない。形態的には、平面形が正三角形状を呈し、各々の頂部は丸みをもち、三辺はそれぞれ内弯した形状を呈している。表面は、全体的にゆるやかに盛り上がり沈線文や刺突文あるいは押圧縄文によって文様の施されるものが多い。裏面は、表面とは逆に内側に弯曲して窪み、文様をどの施されないものである。

残存状況の良好なものをもとに形態分類すると２類に大別することができる。A類は、三辺の内弯度が強いもので、三方に伸びる脚が長く脚体の幅の狭いものである。B類は、A類とは逆に三辺の内弯度が弱いもので、三方に伸びる脚が短く脚体の幅の広いものである。A類は、さらに脚端部が肥大するもの（１類）としないもの（２類）に細分できる。

三脚形土製品
- A類（三辺の内弯度が強く脚体の幅が狭い）
  - １類（脚端部が肥大する）
  - ２類（脚端部が肥大しない）
- B類（三辺の内弯度が弱く脚体の幅が広く、脚端部は肥大しない）
- 不明（破損品であるため不明なもの）

これらの分類基準をもとに総数14点を分類すると、A類は７点、B類は６点、不明は１点となり、A類とB類の出土数量はほぼ同数である。A－1類は、完形品が１点出土するに過ぎな

しかも三辺の内弯度も弱いものである。本遺跡出土の特にA類に分類したものとは明瞭な形態的相違がみられる。この相違が、時期差による用途の変更によって人体的要素が付加されるといった性格的変移を示すものか、地域差によるものなのかについては、今後の資料の増加を待って検討する必要がある。

3．耳飾り（第609図、図版325）

耳飾りは、4点出土している。総て短い円柱状を呈し一方の端部周縁がつば状に広がるものである。

第609図1は、周縁の一部は欠損するが、復元最大径3.9センチメートルを測れる。円柱状の芯部は大きめの孔が貫通している。表面は、丁寧にみがきが施され全面丹塗りとなっている。

第609図2は、約2分の1の破片で表面の風化が著しいものである。復元最大径3.6センチメートルをれる。円柱状の芯部には貫通孔が認められる。丹の付着は認められない。

第609図3は、周縁の一部は欠損するが、最大径6.95センチメートルを測れる大振りなものである。円柱状の芯部には貫通孔が認められる。円柱状の表面には指圧痕が観察され、荒い加工となる。つば状に広がる表面は丁寧なみがきが施され平らにできている。丹の付着は認められない。

第609図4は、周縁の一部は欠損するが、復元最大径3.8センチメートルを測れる。円柱状の心部にはつば側から盲孔が穿たれ、孔は器体の中ほどまで達している。つば側とは反対の端部は丸みをおびている。丹の付着は認められない。

以上、4点の時期は、総て第Ⅰ群土器期から第Ⅴ群土器期の間に位置付けられる。

4．円盤状土製品（第608図、図版325）

円盤状土製品は、総数23点出土している。これらは、土器片の周縁を打ち欠いたり、周縁を研することによって円形、楕円形、不整円形、不整楕円形、不整六角形状に整形されている。

形態別数量は、円形8点、楕円形5点、不整円形3点、不整楕円形6点、不整六角形1点である。不整をなものも含めた円形状を呈するものと楕円形状を呈するものとでは数量的な開きは見られない。こらを土器の部位別数量で見ると、胴部片を利用するもの19点（82.6%）、底部片を利用するもの3（13.0%）、口縁部片を利用するもの1点（4.3%）となり、胴部片を利用するものが圧倒的に多い。大きさは、最大径が4から5センチメートルのものが大半を占めるが、中には最大径6.7センチメールの大振りなものや最大径が2.3センチメートルの小振りなものもある。

次に、土器群との関係を見ると、第608図1は、CQ87区6層上面出土の土器（第180図1）と同一個体と考えられるが、出土層位から第Ⅰ群土器期から第Ⅲ群土器期の間に属するものである。以下出土層位から同図15・16は、第Ⅰ群土器期に属するものであり、同図2は、第Ⅱ群

い。

大きさについては、脚長が2.5センチメートルの比較的小振りなものから、脚長が5.5センチメートルの比較的大振りなものまである。

これらの三脚形土製品と土器群との関係は、出土層位から第606図1・2・3は、第Ⅰ群土器期～第Ⅳ群土器期の間に、第606図4～第607図14は、第Ⅰ群土器期～第Ⅴ群土器期の間にそれぞれ位置づけられる。時期的には、縄文前期末大木6式期～縄文中期前葉大木7b式期の間に属するものである。

以上述べたこれらの三脚形土製品に類似するものは、現在、富山県と新潟県及び東北各県から出土が確認されている。時期的には、縄文時代中期前葉から縄文時代晩期にまでわたっており、特に縄文時代中期に出土例が集中する傾向を示している（金子；1983）。本県では、出土例が少なく、現在、本遺跡を除くと5点の出土が知られているだけである。これら5点の内、時期の明らかにできるものは、沼津貝塚から3点、南境貝塚から1点（宮城県；1981）の4点で、いずれも縄文時代後期に属するものとされている。本遺跡例は、出土時期としては最も古い時期に属するものと考えられる。

三脚形土製品の用途については、平面形が二等辺三角形状を呈するものの多いことや、乳房や臍部の表現されるものも存在すること、文様の左右対称性が見られることなどから一般的には人体を表現したもので土偶の変形またはそれに近い性格をもつものなどとも考えられている。しかし、本遺跡出土の三脚形土製品は、全容の想定できるものは総て平面形が二等辺三角形状を呈するというよりも明瞭に正三角形状を呈している。また、中央部に2個の小孔を穿つもの（第607図10）も1点あり、この小孔を乳房を表現したものと見る見方もあるが、意見の別れるところである。文様の左右対称性については、線対称の軸が1本考えられるものは、第606図4・7・9であり、他に強いてあげれば第606図3、第607図11は、走る沈線の本数の多い脚部中央を対称軸に、第606図6は、脚部中央を走る一本の直線を対称軸にそれぞれ考えられなくもない。しかし、これらは文様の対称性が考えられるものであってもこれらの中に人体の上下関係を明瞭に示すものは見い出し難い。さらに、第606図1・8、第607図14は、明らかに上下関係を意図した施文とは考え難いものである。よって本遺跡出土の三脚形土製品については、正三角形自体が人体を表現したものかどうかは別にして細部については人体を表現したものであるとは断定できない。

本遺跡出土の三脚形土製品に酷似するものは、山形県の思い川A及び思い川B遺跡、牧野遺跡、百々山遺跡（山形県；1982）などから出土している。しかし、新潟県内からは、本遺跡の包含層よりは新しい時期に属するものであるが、明確に乳房や臍部を表現したと考えられるものも出土している（新潟県；1983）。これらは、平面形が二等辺三角形状を呈するものが多く、

土器期に、同図7は、第III群土器期に属するものである。その他、第Ⅰ群土器期から第III群土器期の間に属するもの2点、第Ⅰ群土器期から第IV群土器期の間に属するもの10点、第Ⅰ群土器期から第Ⅴ群土器期の間に属するもの4点、時期の明らかでないもの1点がある。

円盤状土製品は、菅生田遺跡の報文によって、縄文時代中期末から後期前葉にかけて多量に製作されたものとされ、他の時期にはすくないことが指摘されている（丹羽；1982）。さらに、二屋敷遺跡の報文によっても上記同様の結果が得られている（加藤；1984）。本包含層の時期は、出土土器から縄文時代前期末から中期前葉にかけてのものであり、多量に出土した土器量に比べて円盤状土製品の数量はきわめて少ない。このことは、上記の指摘を裏付けるものである。

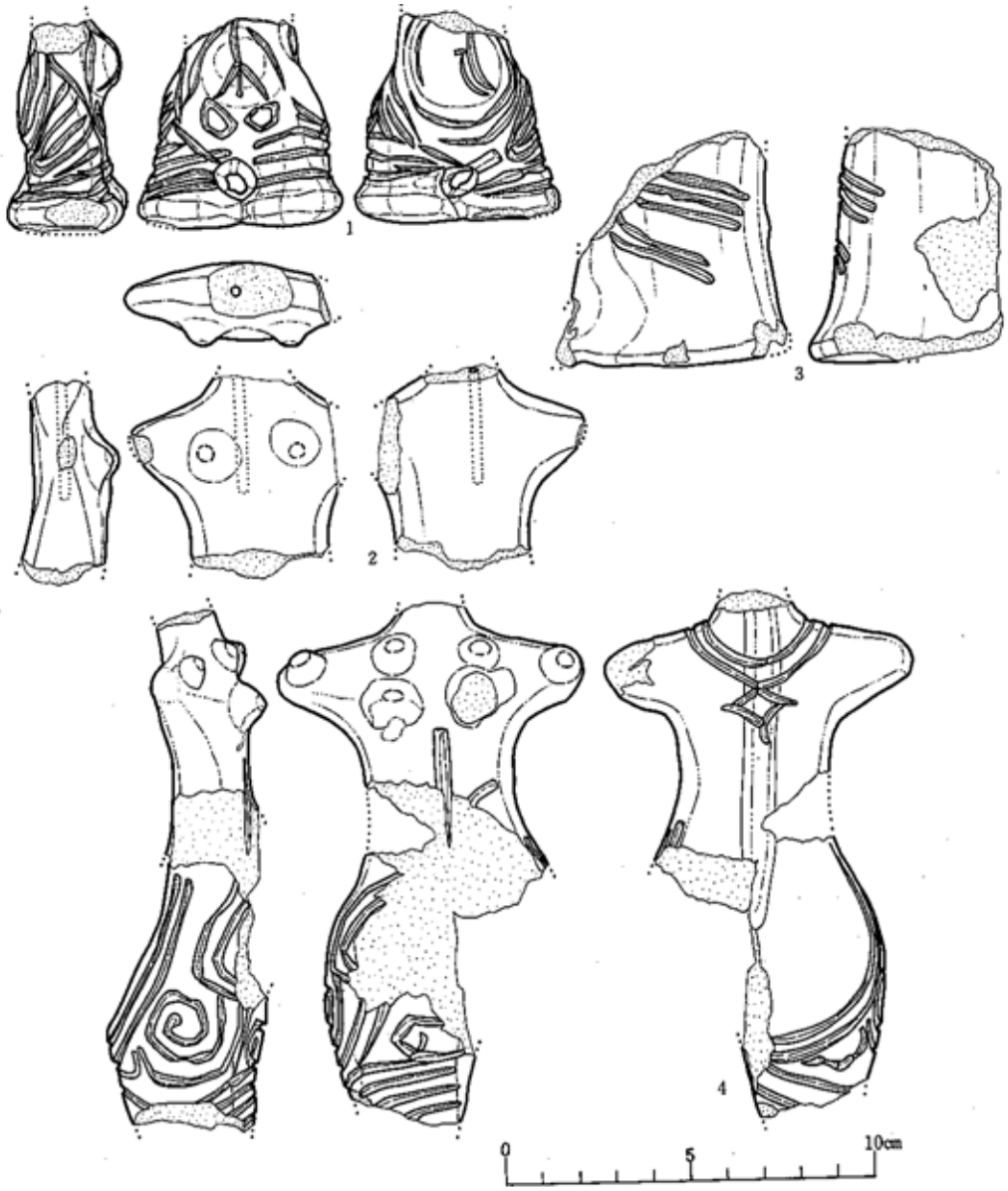
5．不明土製品、岩製品（第609図、図版324）

不明土製品は2点、岩製品は1点出土している。総て欠損品であるため器種等の不明なものである。

第609図5は、厚みのある板状の土製品である。欠損品であるため全容は不明であるが周縁の一部にくびれ部が観察される。表裏は、平らにできており一部に細かい傷が観察されるだけで他に文様等は施されていない。

第609図6は、土製の棒状破片である。両端部が欠損するため全容は不明であるが、一部に三角形を呈する刺突文と二条の細線が認められる。

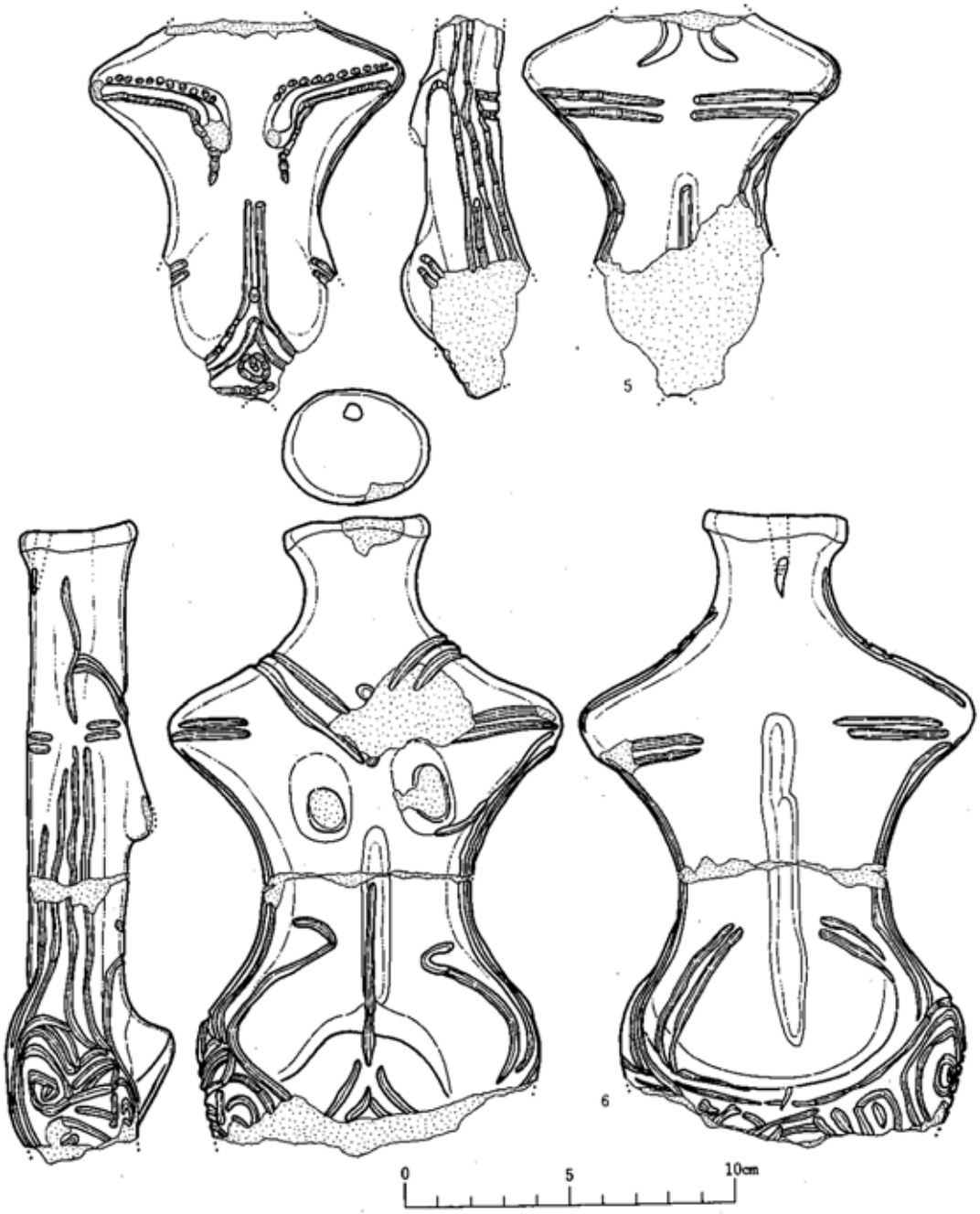
第609図7は、軟質の岩石で、欠損品であるため全容は不明である。平面形が略楕円形状を呈し側面には4枚の板状節理面が観察される。平らな表面中央部には、縦位に走る数条の細線が観察されるが、他には人為的な加工痕は認められない。裏面は、節理面から剥離している。



番号	地区・層位	伴出土器 ※	分類	高さ(mm)	幅(mm)	備考	写真図版
1	CL83区・5層	第Ⅰ群	C?	(57.0)	55.0	胴部で破損，腹部から脚部残存，沈線文	324－13
2	CL70区・3層	第Ⅰ群～Ⅲ群	C－2	(55.0)	(55.0)	腹部以下と頭部及び左腕欠損，頭部欠損面に小孔1，無文	324－5
3	CM70区・5層	第Ⅰ群～Ⅲ群	A?	(63.0)	(62.0)	左脚部破片，平行沈線文	324－18
4	CO88区・園ベルト3層	第Ⅰ群～Ⅳ群	B－2	(141.0)	82.0	頭部と左側腹部以下及び右側脚部の一部欠損，沈線文，－※CN37・北ベルト2層と接合	324－2

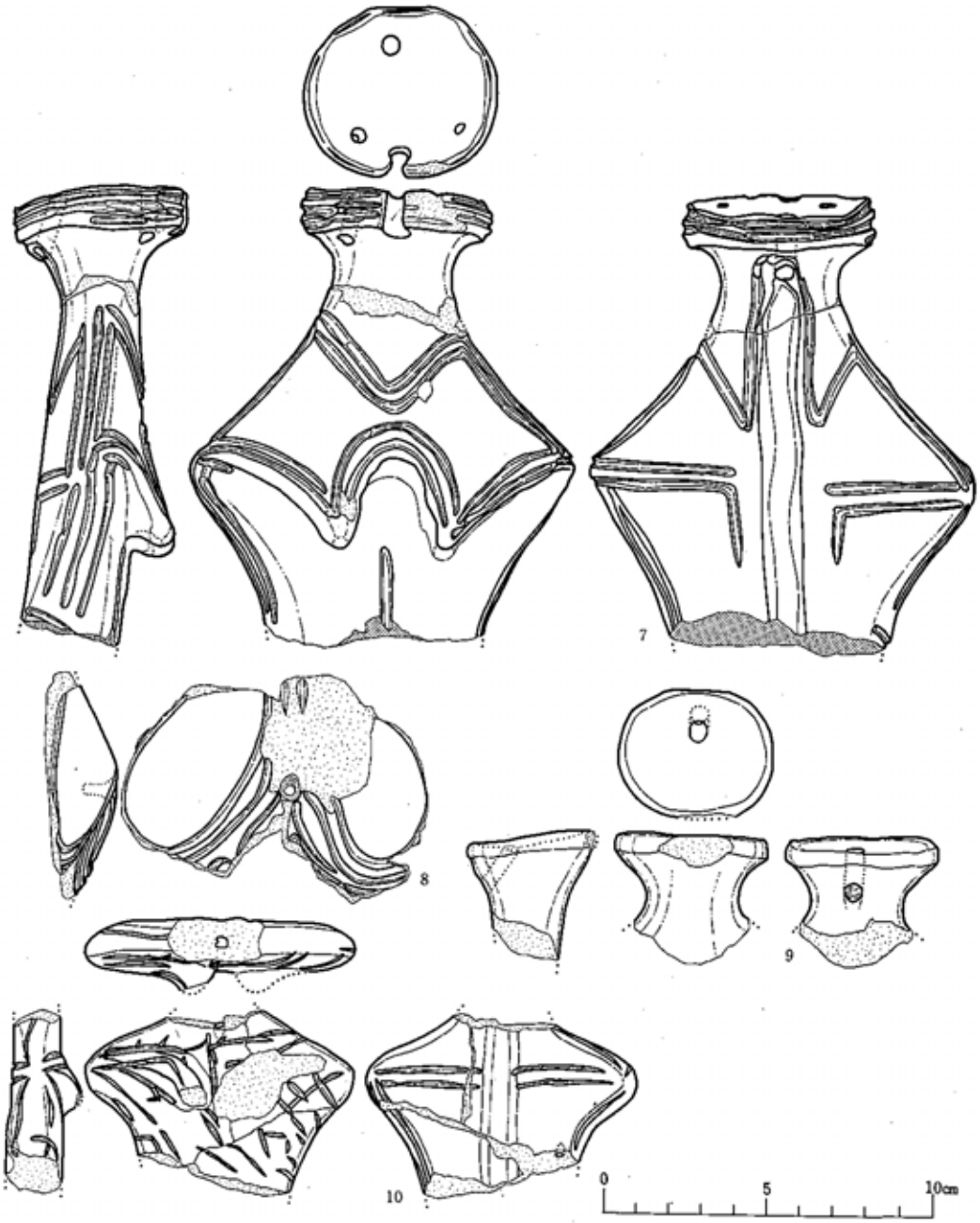
※2次廃棄による，より古い遺物の可能性があり，第Ⅰ群以降については，すべて第Ⅰ群～□群と表示。

第602図　土　偶　(1)



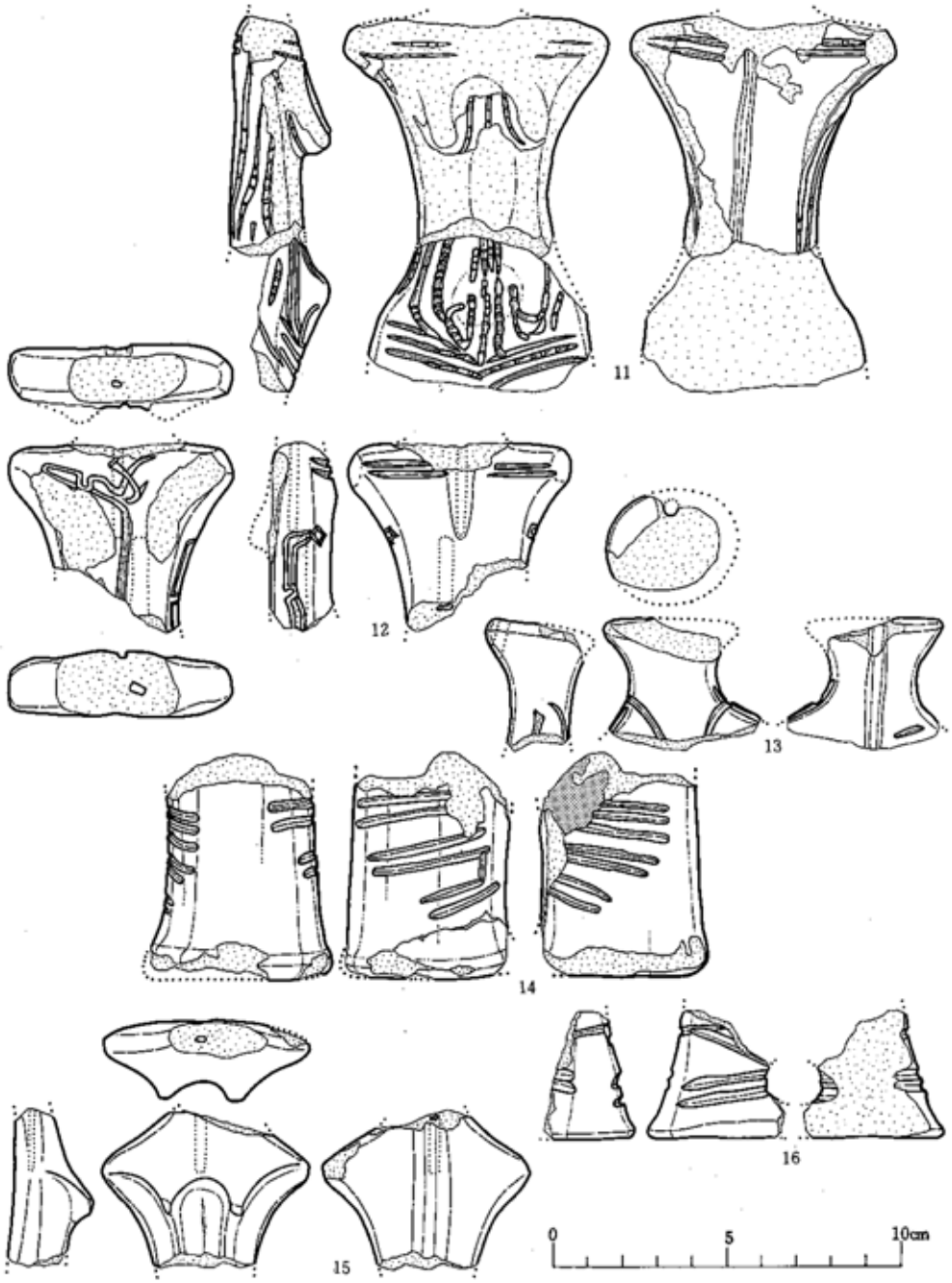
番号	地　区・層　位	排出土器	分　類	高さ(mm)	幅(mm)	備　　考	写真図版
5	CN86区・7層	第Ⅰ群～Ⅳ群	B－1	(115.0)	93.0	頭部及び脚部欠損の胴部破片，連続刺突文，沈線文，押し引き文，隆線文	324－8
6	CP88区・3層	第Ⅰ群～Ⅳ群	A	(193.0)	117.0	脚部欠損，頭頂部穿孔1，沈線文，　CL85区3層上面と接合	324－1

第603図　土　偶　(2)



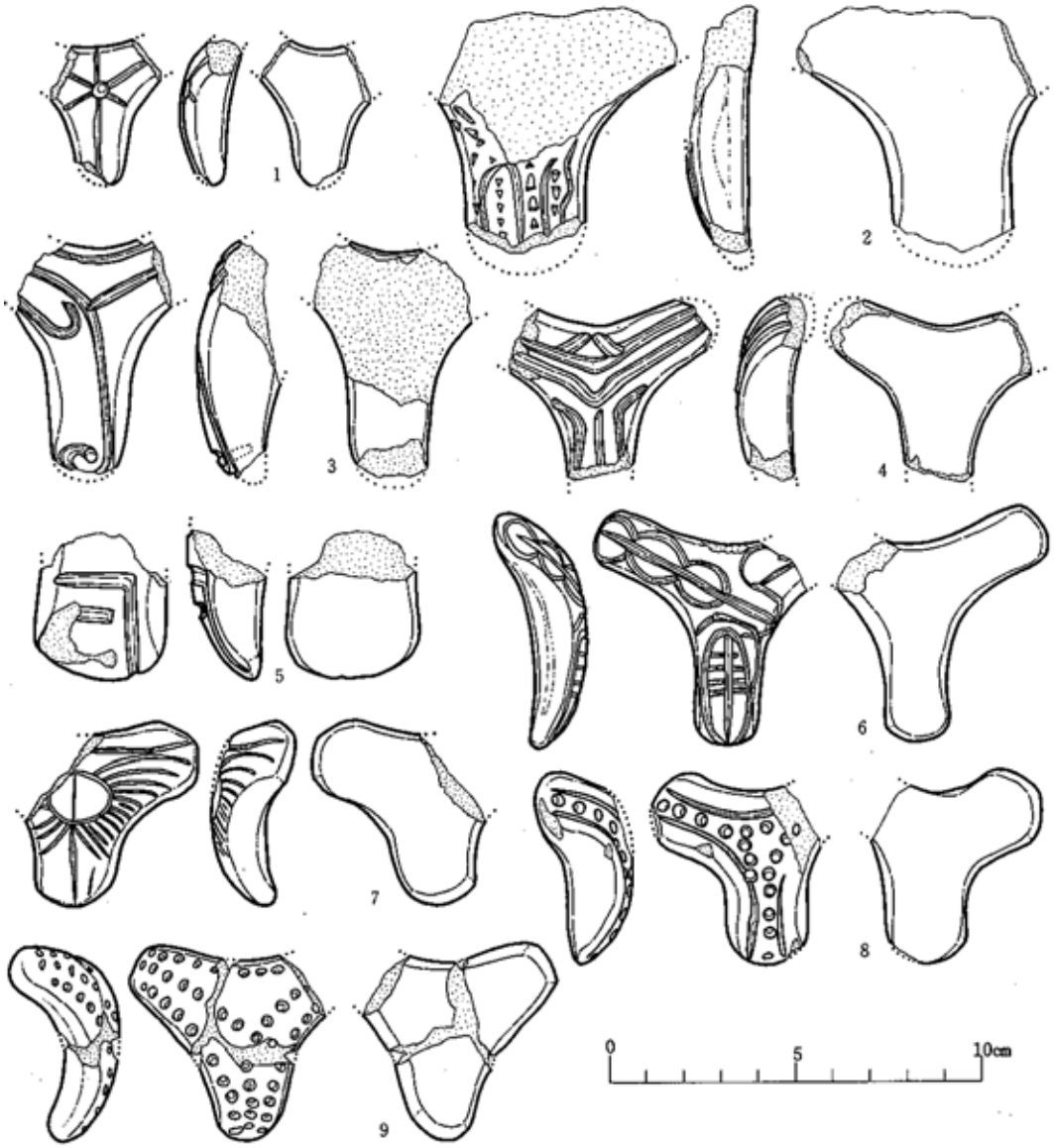
番号	地区・層位	伴出土器	分類	高さ(cm)	幅(cm)	備考	写真図版
7	CL73区・1層	第Ⅰ群～Ⅳ群	A	(139.5)	116.0	腹部以下欠損，頭頂部穿孔3，沈線文，腹部欠損面に付着物(樹脂？)	324－3
8	CL82区・1層	第Ⅰ群～Ⅳ群	A？	(69.0)	(93.0)	腹部斜面の剥離片，頭部盲孔1，沈線文	324－10
9	CO89区・4層下部	第Ⅰ群～Ⅳ群	A？	(39.5)	46.0	頭部以下欠損，頭頂部穿孔1，無文	324－4
10	CL75区・3層	第Ⅰ群～Ⅳ群	B－1	(56.0)	81.5	頭部及び腹部以下欠損，沈線文，頭部及び腹部欠損面に不孔，外1，CL81区と接合	324－9

第604図　土　偶　(3)



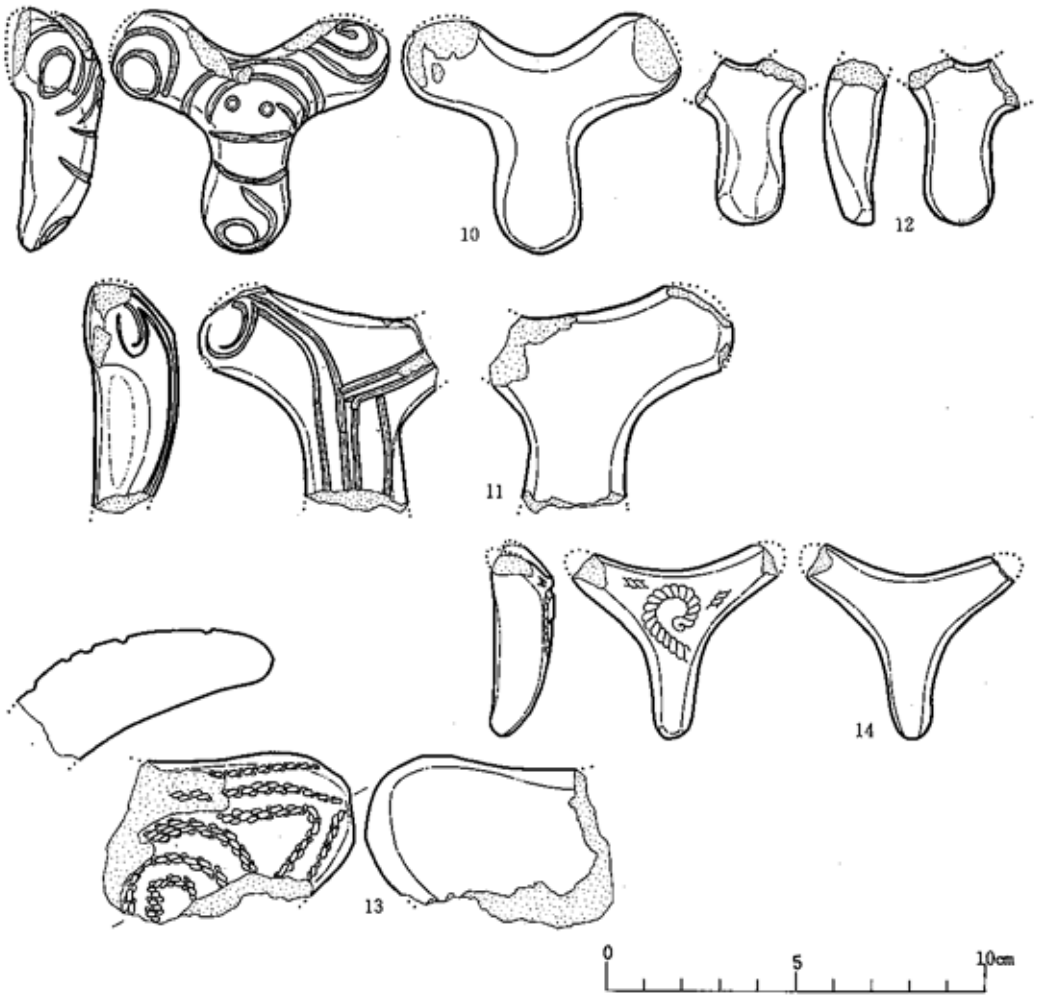
番号	地区・層位	伴出土器	分類	高さ(cm)	幅(cm)	備考	写真図版
11	CN89区・3層	第Ⅰ群～Ⅴ群	B－1	(107.0)	75.0	頭部と胸部及び腹部背面欠損，押し引き文，～■CO89区・南ベルト1層と接合	324－12
12	CS88区・1層	第Ⅰ群～Ⅴ群	C－1	(54.0)	64.0	頭部及び腹部以下欠損，沈線文，頭部及び腹部欠損面に小孔各1	324－ 7
13	CL85区・5層	第Ⅰ群～Ⅴ群	A？	(38.0)	(33.0)	頭頂部及び胸部以下を欠損する頭部破片，沈線文，頭頂部穿孔1	324－ 6
14	CM70区・1層	第Ⅰ群～Ⅴ群	A？	(64.0)	(46.0)	右側脚部破片，沈線文，欠損面にアスファルト付着	324－14
15	CM84区・西ベルト2層	第Ⅰ群～Ⅴ群	C－2	(44.0)	59.0	頭部及び腹部以下欠損，無文，頭部欠損面に小孔1	324－15
16	CS88区・1層	第Ⅰ群～Ⅴ群	不明	(37.0)	(39.0)	右側脚部破片，沈線文	324－16

第605図　土　偶　(4)



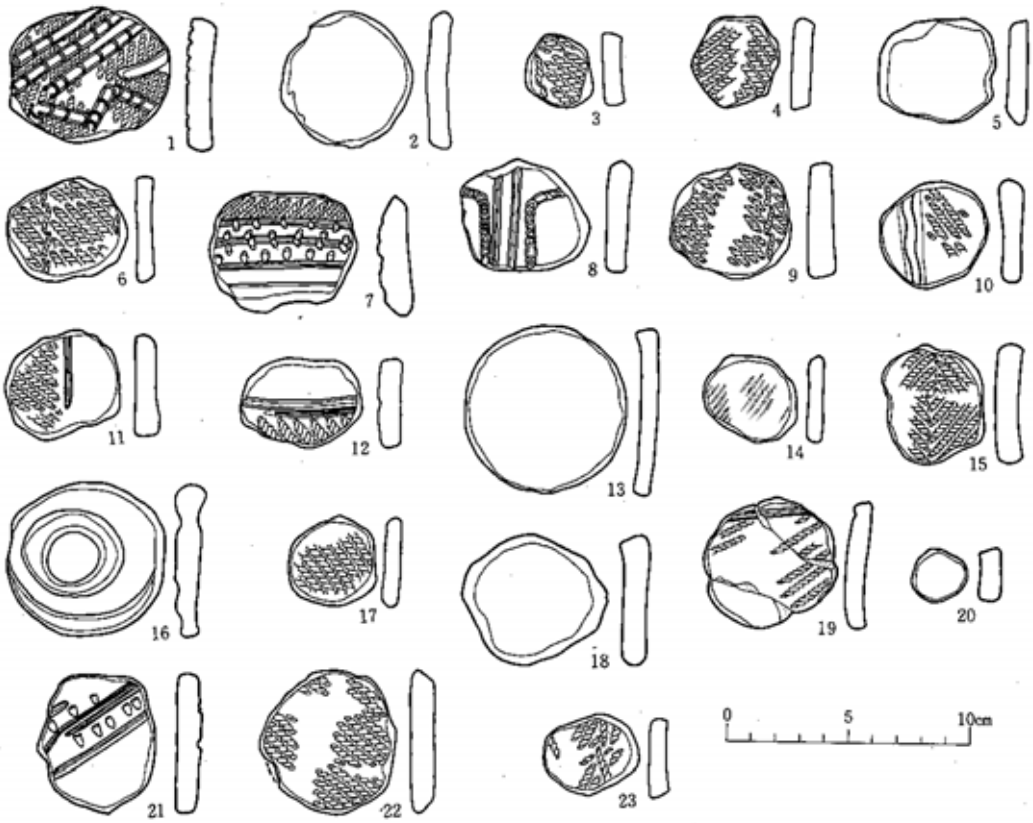
番号	地区・層位	伴出土器	分類	長さ(cm)	幅(cm)	備考	写真図版
1	CN89区・6層		B	(39.0)	(29.0)	沈線文	325－5
2	CM86区・3層	第Ⅰ群～第Ⅳ群	B	(66.0)	(63.0)	沈線文，滝状刺突文	325－12
3	CO86区・4層	第Ⅰ群～第Ⅳ群	A－2	(62.5)	(41.0)	沈線文	325－11
4	CO86区・3層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	A－2	(48.0)	(53.0)	沈線文	325－6
5	CL85区・北ベルト2層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	不明	(39.0)	34.0	沈線文	325－8
6	CL85区・4層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	A－2	63.0	(55.5)	沈線文	325－4
7	CL75区・2層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	B	49.0	(45.0)	沈線文	325－2
8	CM89区・西ベルト1層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	B	51.0	(45.0)	沈線文，刺突文	325－7
9	CO89区・3層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	B	52.0	(51.0)	刺突文	325－9

第606図　三脚形土製品　(1)



番号	地 区・層 位	伴出土器	分 類	長さ(mm)	幅(mm)	備 考	写真図版
10	CL87区・5層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	A－1	63.0	72.0	沈線文，刺突文	325－1
11	CN87区・2層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	A－2	(60.0)	(62.0)	沈線文	325－3
12	CQ88区・5層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	A－2	(43.0)	(29.0)	無文	325－10
13	EB～EE84区・1層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	B	(45.0)	(65.0)	押圧縄文(L・R・r)	325－13
14	EB～EF85区・3層	第Ⅰ群～第Ⅴ群	A－2	(51.0)	(53.5)	押圧縄文(L・r)	325－14

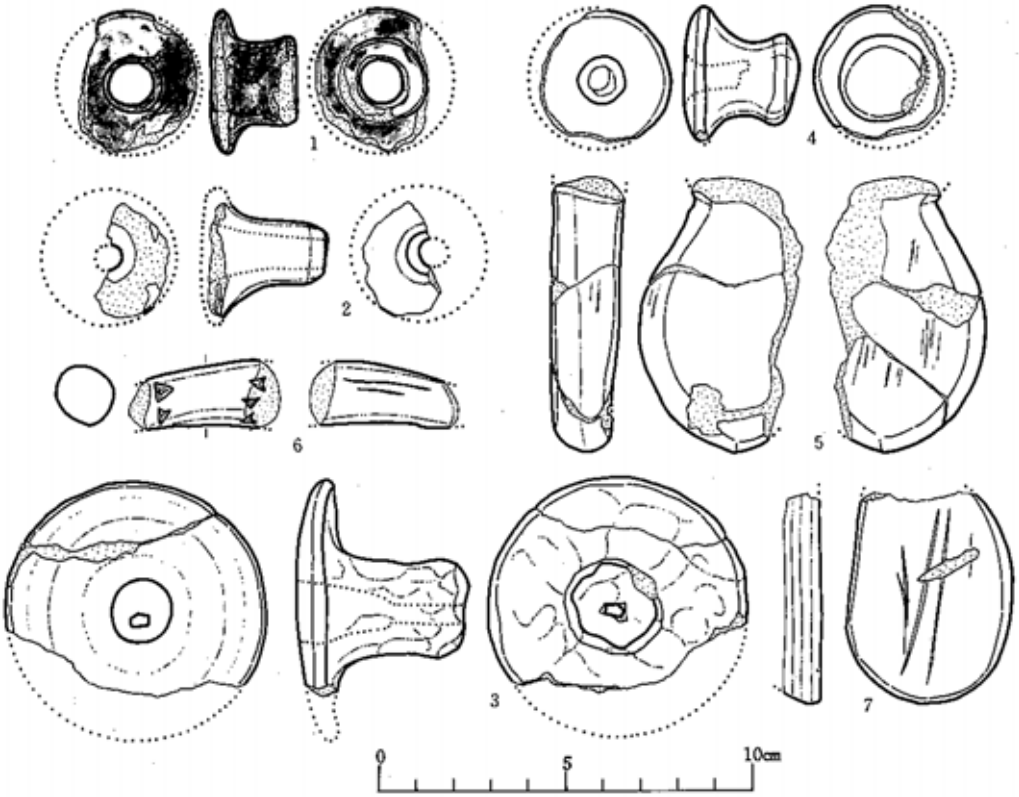
第607図　三脚形土製品　(2)



番号	地区・層位	伴出土器	形状	大きさ(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	※研磨度(%)	孔	付着物	備考	写真図版
1	CM70区・4層	第Ⅰ群～Ⅱ群	楕円形	69×57	10	51.0	80	なし	なし	胴部：押し引き文，沈線文，縄文(RL)，CQ87区6層上部(第180図1)と同一個体	325−20
2	CL73区・2層	第Ⅰ群～Ⅲ群	円形	56×54	9	29.0	70	なし	なし	底部：無文	325−21
3	CL73区・5層	第Ⅲ群	不整円形	31×22	9	7.5	100	なし	なし	胴文：縄文（LR）結節文（片結び一順）	325−22
4	CL80区・1～2層	不明	不整六角形	40×36	8	12.1	80	なし	なし	胴部：結束縄文（LR）	325−23
5	CL82区・2層	第Ⅰ群～Ⅳ群	不整楕円形	52×43	8	18.5	40	なし	なし	無文	325−24
6	CL83・西ベルト1層	第Ⅰ群～Ⅳ群	楕円形	49×40	7	17.7	70	なし	なし	胴部：縄文（LR）結節文(片結び一順)	325−25
7	CL83区・2層	第Ⅲ群	楕円形	61×49	11	37.9	40	なし	なし	口縁部：沈線文，交互刺突文，縄文（LR）	325−26
8	CL84区・3層	第Ⅰ群～Ⅳ群	不整楕円形	50×45	9	23.1	50	なし	なし	胴部：沈線文，押し引き文	325−27
9	CL84区・4層	第Ⅰ群～Ⅳ群	円形	50×43	11	21.0	70	なし	なし	胴部：縄文（LR）結節文（片結び一順）	325−28
10	CM85区・北ベルト東北層	第Ⅰ群～Ⅴ群	円形	45×42	8	17.9	100	なし	なし	胴部：粘土紐貼付，縄文（LR）	325−29
11	CM85区・3層	第Ⅰ群～Ⅳ群	楕円形	48×41	11	24.2	100	なし	なし	胴部：縄文（LR），沈線文	325−30
12	CN85区・3層	第Ⅰ群～Ⅳ群	不整楕円形	50×37	8	18.3	60	なし	なし	胴部：縄文（RL），沈線文	325−31
13	CO86区・3層	第Ⅰ群～Ⅴ群	円形	68×67	8	43.3	100	なし	なし	底文：無文	325−32
14	CO86区・西ベルト3層	第Ⅰ群～Ⅴ群	不整楕円形	40×34	7	11.0	100	なし	なし	胴部：縄文（L）	325−33
15	CP87区・7層	第Ⅰ群	不整楕円形	48×40	10	24.7	80	なし	なし	胴部：結束縄文（LR・RL）	325−34
16	CP87区・7層	第Ⅰ群	円形	66×63	9	42.2	100	なし	なし	口縁文：沈線文	325−35
17	CQ87区・5層	第Ⅰ群～Ⅲ群	不整円形	38×34	8	10.5	100	なし	なし	胴部：縄文（LR）	325−36
18	CO88区・1層	第Ⅰ群～Ⅴ群	不整円形	59×52	11	37.6	80	なし	なし	底部：無文	325−37
19	CO88区・3層	第Ⅰ群～Ⅳ群	円形	55×52	8	25.2	100	なし	なし	胴部：縄文（RL），沈線文	325−38
20	CO88区・3層	第Ⅰ群～Ⅳ群	円形	23×21	8	4.5	100	なし	なし	無文	325−39
21	CO88区・南ベルト4層	第Ⅰ群～Ⅳ群	不整楕円形	51×47	10	30.2	70	なし	なし	胴部：沈線文，刺突文	325−40
22	CP88区・2～3層	第Ⅰ群～Ⅴ群	円形	58×55	9	32.4	(100)	なし	なし	胴部：縄文（RL）	325−41
23	CP88区・4層	第Ⅰ群～Ⅳ群	楕円形	39×30	8	10.3	70	なし	なし	胴部：縄文	325−42

※ 研磨度（%）＝研磨部（m・m）／周縁部（m・m）×100

第608図　円盤状土製品



番号	地 区・層 位	伴出土器	分 類	長さ(cm)	幅(cm)	備 考	写真図版
1	CM88区・1層	第1群～第Ⅴ群	耳飾り	22.0	(38.5)	全面丹塗り	325－17
2	CM86区・北ベルト1層	第1群～第Ⅴ群	耳飾り	(32.5)	(35.5)		325－16
3	CN88区・2層上面	第1群～第Ⅴ群	耳飾り	45.5	69.5		325－15
4	CJ78区・1層	第1群～第Ⅴ群	耳飾り	30.0	(37.0)		325－18
5	CO88区・北ベルト3層上面	第1群～第Ⅴ群	不明土製品	(74.0)	(43.0)		325－11
6	CL84区・――	第1層～第Ⅴ群	不明土製品	(40.0)	18.0	刺突文，沈線文	325－17
7	CO89区・3層	第1層～第Ⅴ群	不明粘製品	(56.0)	44.0		325－19

第609図　耳飾り・その他の土製品

Ⅷ. ま　と　め

引用・参考文献

Ⅷ. ま　と　め

1．小梁川遺跡は、刈田郡七ケ宿町字小梁川・字板沢・字白ハゲに所在し、白石川・小梁川によって形成された河岸段丘上に立地している。
2．遺物包含層は、東側と西側とに分けられ、東側はさらにふたつの地点に分けられる。
3．東側遺物包含層は、大木６式から大木７b式に形成され、層位的に第Ⅰ群～第Ⅴ群の５つの土器群が変遷することが明らかとなった。
4．西側遺物包含層は、分層することができなかった。
5．出土土器は、仙台湾以南の阿武隈川流域でひとつのまとまりが把握され、大木式土器の中でも北部の北上川流域のものとは異なることが明らかとなった。ただし、群によっては、まとまりのある資料に欠け、明瞭な対比ができず、今後に課題を残すことになった。
6．土偶においても、土器と同様に、阿武隈川流域と北上川流域とで形態的差異のあることが明らかとなった。
7．遺物包含層中には、シカやイノシシ等の焼骨が確認された。

《引用・参考文献》

会田　　進（1974）：『扇平遺跡』郷土の文化財７　岡谷市教育委員会

相原康二・鈴木優子（1982）：「江釣子村鳩岡崎遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』ＸＶ－1，2　岩手県文化財調査報告書第70集

麻生　　優（1956）：「十三菩提式土器の再吟味」『貝塚』59号

安孫子昭二（1982）：「アスファルト」『縄文文化の研究』第８巻　雄山閣出版

阿部明彦他（1976）：『上山市牧野遺跡』上山市教育委員会

阿部　明彦（1982）：「縄文時代　中期」『村山市史』別巻１・原始・古代編　村山市史編さん委員会

阿部明彦・佐々木洋治・佐藤正俊（1984）：『水木田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第75集

阿部　恵・遊佐五郎（1978）：『長者原貝塚』南方町文化財調査報告第１集

伊東　信雄（1957）：「古代史－縄文文化の変遷」『宮城県史』第１巻

稲野　裕介（1983）：『滝ノ沢遺跡（1977～1982年度調査）』北上市文化財調査報告第33集

今村　啓爾・松村恵司（1971）：「横浜市日吉中駒遺跡の中期縄文式土器」『考古学雑誌』第57巻第１号　日本考古学会

今村　啓爾（1972）：『宮の原貝塚』武蔵野美術大学考古学研究会

今村　啓爾（1985）：「五領ケ台式土器の編年－その細分および東北地方との関係を中心に－」東京大学

岩渕康治・佐藤則行・梶原洋（1980）：『三神峯遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第25集

江坂　輝彌（1949）：「相模五領ケ台貝塚調査報告」『考古学集刊』第３冊

江坂　輝彌（1974）：『土偶』校倉書房
江坂輝彌・小野美代子（1983）：『土偶の知識』東京美術
大場磐雄・寺村光晴（1964）：「新潟県中頸城郡鍋屋町遺跡」『日本考古学年報』12
小川出・村田晃一（1986）：『今熊野遺跡ー縄文・弥生時代編』宮城県文化財調査報告書第114集
小笠原好彦（1968）：「東北地方南部における前期末から中期初頭の縄文式土器」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会編
小笠原好彦（1982）：「縄文時代前・中期の土偶」『宮城の研究』1・考古学篇　清文堂
笠原　信男（1985）：「大倉遺跡」「道端遺跡」『七ケ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　宮城県文化財調査報告書第107集
片倉信光・中橋彰吾・後藤勝彦（1976）：『白石市史』別巻・考古資料篇　白石市史編纂委員会
加藤　　孝（1956）：「宮城県登米郡新田村糠塚貝塚について」『登米郡新田村史』
加藤孝・後藤勝彦（1975）：「宮城県登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史』資料編・第1部
加藤道男・阿部博・小徳晶（1984）：「二屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅸ　宮城県文化財調査報告書第99集
金子　拓男（1983）：「三角形土版・三角形岩版」『縄文文化の研究』第9巻　雄山閣出版
興野　義一（1984）：「大木式土器について」『宮城の研究』Ⅰ　清文堂
経済企画庁総合開発局（1972）：『土地分類図（縮尺20万分の1地形分類図）宮城県』
小岩　末治（1961）：『岩手県史』第1巻　上古篇
甲野　　勇（1953）：『縄文土器のはなし』学生社
小平良男・大越道正・阿部俊男・松本茂（1982）：「七郎内C遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅹ　福島県文化財調査報告書108集
後藤　勝彦（1972）：「考古資料」『川崎町史』川崎町史編纂委員会
後藤　勝彦（1984）：「先史編」『七ケ町史　歴史編』七ケ宿町史編さん委員会
今野　　隆（1985）：「若林山遺跡」『七ケ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　宮城県文化財調査報告書第107集
斎野裕彦他（1982）：『北前遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書 第36集
斎藤　吉弘（1977）：『長下遺跡調査概報』七ケ宿町文化財調査報告書第1集
佐藤　庄吉（1957）：『刈田郡全域土器石器調査表』不忘郷土研究所
佐藤　　巧（1981）：『ダム下に沈む七ケ宿街道集落の調査記録ー宮城県刈田郡七ケ宿町渡瀬、原、追見の集落と建築ー』七ケ宿町文化財調査報告書第3集
佐藤　達夫（1983）：「土器型式の実態ー五領ケ台式と勝坂式の間ー」『東アジアの先史文化と日本』六興出版
佐藤　信行（1973）：『築館町嘉倉貝塚調査概報』
志間　奏治（1975）：「亘理町の原始・古代」『亘理町史』上巻　宮城県亘理町
新庄屋元晴・真山悟（1985）：「小梁川遺跡・古代編」『七ケ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　宮城県文化財調査報告書第107集
神保孝造ほか（1985）：『富山県八尾町長山遺跡発掘調査報告』八尾町教育委員会
鈴鹿良一他（1984）：「上ノ台A遺跡」『真野川流域総合開発事業真野ダム関連遺跡発掘報告』Ⅴ　福島県文

化財調査報告書第128集
須藤　隆編（1984）：『中沢目貝塚ー縄文時代晩期貝塚の研究ー』東北大学文学部考古学研究会
芹沢長介編（1979）：『聖山』東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊2
高倉　　淳（1968）：「宮城県気仙沼市大島磯草貝塚出土の土器について」『仙台湾周辺の考古学的研究』
高橋勇治・阿部正光地（1975）：「八景腰巻遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書第47集
高掘　勝喜（1955）：「先史文化」『能登』九学会編　平凡社
武田　将男他（1978）：『大館町遺跡』岩手大学考古学研究会　盛岡市文化財調査報告書第20集
角田　文衛（1936）：「陸前船入島貝塚の研究」『考古学論叢』3
寺村　光晴（1959）：「新潟県中頸城郡柿崎町鍋屋町遺跡概報」『上代文化』29
土肥　　孝（1981）：「阿玉台Ｉａ式以前の土器」『土曜考古』第4号　土曜考古学研究会
土岐山　武（1981）：「長者原貝塚」『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集
土岐山　武（1982）：「松田遺跡」『仙南・仙塩・広域水道関係遺跡調査報告書』Ⅱ　宮城県文化財調査報告書第88集
中村　龍雄（1980）：『中部山地縄文土器集成ー諏訪湖周辺の考古学(2)ー』
新　潟　県（1983）：『新潟県史』資料編1　新潟県史編纂委員会
西村　正衛（1984ａ）：「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部
西村　正衛（1984ｂ）：「千葉県香取郡小見川町阿玉台貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部
西村　正衛（1984ｃ）：「千葉県香取郡小見川町木之内明神貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究』早稲田大学出版部
丹羽　　茂（1981）：「大木式土器」『縄文文化の研究』4　雄山閣出版
丹羽茂・阿部博・小野寺祥一郎（1982）：「勝負沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅵ　宮城県文化財調査報告書第83集
丹羽茂・阿部博・小野寺祥一郎（1982）：「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書』Ⅷ　宮城県文化財調査報告書第92集
能登　　健（1983）：「土偶」『縄文文化の研究』第9巻　雄山閣出版
芳賀　寿幸（1983）：「考古資料」『柴田町史』資料篇Ｉ　宮城県柴田町
林　　謙作（1965）：「縄文文化の発展と地域性ー東北」『日本の考古学』Ⅱ　河出書房新社
藤沼邦彦他（1969）：『埋蔵文化財緊急発掘調査概報ー長根貝塚ー』宮城県文化財調査報告書第19集
松本彦七郎（1929）：『陸前国桃生郡小野村川下り響介塚調査報告』東北帝国大学理学部地質学・古生物学教室邦文報告第7号
松本　秀明（1984）：「沖積平野の形成過程からみた過去1万年間の海岸線変化」『宮城の研究』清文堂
馬目　順一（1975）：『大畑貝塚調査報告』いわき市教育委員会
真山悟・菊地淳一（1985）：「小梁川東遺跡」『七ケ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書』Ｉ　宮城県文化財調査報告書第107集
宮　城　県（1981）：『宮城県史』34．資料篇11　宮城県史編纂委員会

宮城県教育委員会（1981）：『宮城県遺跡地名表』宮城県文化財調査報告書第73集
宮城県教育委員会（1985）：『中の内A遺跡　現地説明会資料』
宮澤　寛他（1974）：『港北ニュータウン地域内文化財調査報告』Ⅳ　横浜市埋蔵文化財調査委員会
武藤　雄六（1968）：「長野県富士見町籠畑遺跡の調査」『考古学集刊』4―1
村田町史編纂委員会（1977）：「原始時代」『村田町史』宮城県村田町
目黒　吉明（1964）：「音坊遺跡」『福島県史』第六巻　考古資料
安田　喜憲（1973）：「阿武隈川下流域における縄文時代の自然環境の変遷と人類―とくに縄文時代早期～中期を中心として―」『東北地理』第25巻　第2号
八巻　正文（1979）：『大木囲貝塚―昭和52年度環境整備調査報告―』七ヶ浜町文化財調査報告書第4集
山内　清男（1937）：「縄文土器型式の細別と大別」『先史考古学』1―1
山内　清男（1979）：『日本先史土器の縄文』先史考古学会
山口　　明（1980）：「縄文時代前期末葉鍋谷町系土器群の動態」『長野県考古学会誌』39
山　形　県（1982）：『山形県史』第1巻
遊佐　五郎（1980）：『沼崎山遺跡』豊里町文化財調査報告書第2集
吉田　　格（1982）：『神谷原』Ⅱ　八王子市椚田遺跡調査会
吉田幸一他（1975）：「壇ノ腰遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書第47集